つて胴と蓋との接合部に護謨を入れ、折曲げて絞めつける方法もあります。

次に肉詰の方法ですが、元來罐詰は内容物を腐敗せしめないだけの作業ですから、内容物の良否及び風味の如何は、專ら原料の良否と調理の善惡に依るのは無論です。内容物が水煮製であれば其の儘で、其の他は適當の調理を加へた後罐に容れ、蓋をして封鑞します。此の蓋には豫め中央に小孔を穿つて置くことが必要です。何となれば、蓋を封鑞するに當つて銲の熱のため其の罐が熱せられ、内部にある空氣が膨脹して孔を生じ、内外の空氣が相通じて腐敗の原因となるからであります。で中央に小孔を穿けておきますと、空氣は其の小孔から自在に出入して封鑞を完全にします。中央の小孔は周圍の封鑞が完全になつてから密閉します。斯うして内容物を容れて密閉した罐は、これを沸騰に近い熱湯の中に入れて間隙の有無を檢査します。罐内の空氣は熱湯のために膨脹しますから、如何に微少な間隙があつても、膨脹した内部の空氣はそこからブツ〳〵と泡沫をなして罐外に排出されます。だから泡沫を生ずる罐は直に取上げて其の孔を塞ぎ、各罐とも異狀の無いことを見極めてから、更に熱湯の中に入れ十分に熱を加へて罐内の空氣を膨脹せしめ、罐を取出して手早く蓋又は底に錐を以て小孔を穿ち、内部の膨脹した空氣を排除し、銲を以て其の小孔を封鑞します。これを排氣又は瓦斯脫と云ひます。此の作業が終つた後、密閉裝置の蒸釜に入れ閉鎖して熱を通じ、攝氏百七八度から百十七八度位の熱を與へて殺菌します。

此の段と次の段とは、以上の製造順序を鮭の罐詰の實例によつて說明したもので、此の段は最も進步した罐詰の方法、次の段は舊式の方法を擧げてをります。

「陸揚」　船荷を陸へあげること、

「無數」　數の限りなきこと、かぞへつくせぬこと、

「運搬機」　運搬する機械、

「調理機」　調理する器械、

「膨脹」　ふくるゝこと、ひろがりふとること、『肪脹』に同じ。

「煮沸」　にわかすこと、にえたつこと、『しやふつ』に同じ。

「完全に製造された罐詰は、かなり長く貯藏に堪へるものである、云々」

此の段は罐詰の良否と其の見別け方に就いて述べたもので、前半は北極探險隊の話に依つて、罐詰が久しきに堪へることを述べ、後半は不良の罐詰に就いて其の見別け方を說いてをります。

完全な罐詰は脫氣せられてゐるので、内部にある空氣の收縮に依つて、罐の面が緊張して凹面

を生じ、これを打てばカチ〳〵と緊まつた音響を發するものです。之に反して異狀のある罐詰は內容物の腐敗によつて瓦斯を發生し、その罐の面が弛み、其の部分が膨れ上つて、これを叩けばポコ〳〵と太鼓を叩くやうな音響を發します。だから罐詰の良否を檢査するには、通常其の蓋或は底の面を木製の棒で叩き、其の音響に依つて之を鑑知するのでありますが、尙正確な檢査の方法としては、罐を溫室に入れ黴菌の發生に最も適度な溫度（攝氏二十五度乃至三十七度）を與へ、七日乃至十日を經て取出し、其の異狀の有無を檢査するのであります。

『貯藏』　たくはへおくこと、ためおくこと、『貯蓄』に同じ。
『陳列』　ならべつらねること、ならべおくこと、
『空虛』　むなしきこと、から、『中空』に同じ
『殺菌』　黴菌を殺すこと、
『容器』　物を入れるうつは、『いれもの』に同じ。

なほ水產講習所の敎授木村金太郎氏が東京日々の通俗講話に『家庭罐詰と壜詰』と題して、面白い研究を發表されてをります。參考の資として左にその一部を轉載しきおきませう。

家庭罐詰と壜詰

——新考案の硝子蓋罐詰——

家庭において食料品を罐詰め又は壜詰めとして貯藏することは、本邦と異なり、北米合衆國及びドイツ國では盛んに行はれてゐる。

合衆國では、家庭罐詰の一人一ヶ年當りの製造高は八・七『ポンド』（內、果實罐詰が一・七『ポンド』、野菜罐詰が四・八『ポンド』で、罐詰消費高の約十五％に當る。

ドイツでは米國よりも家庭食料品の貯藏は一層盛である。

歐洲大戰中食料品の缺乏のため、家庭における壜詰法の必要が痛切に感ぜられ、なほ戰後は馬克相場の下落による物價騰貴のため、家庭經濟の必要上、更にこれが盛に普及せらるゝに至つた。

ベルリン市の中流家庭では貯藏用壜を三四百個以上備へて置く所が少くない。

それは自宅の畑や庭に生じた野菜果物、自から獵漁した獸鳥の肉や魚介藻類、その他いはゆる季節物を簡易に貯藏する事は、一家の經濟、趣味、便利の上に多大の効果があるからで

ある。

なほ歐米行の汽船などで、無聊に苦しむ旅客が、或はマレー半島、インド方面、ハワイ等の珍しい果物を、清潔な甲板の上で、簡易な罐詰または壜詰として置けば、旅行中その珍味を長く味はふことが出來、またそれを故國に送れば、家族や友人の間に、その樂しみを分つことも出來る。

家庭壜詰法には米國式とドイツ式とあり、ドイツ式にはまた加熱脱氣法とポンプ脱氣法とがある。本邦には糧友會の發賣に係る簡便なる壜詰用壜がある。

家庭罐詰法は主として合衆國において行はれ、そこでは製罐會社より罐の供給を受け、簡易な家庭卷締機を用ひて蓋を密閉してゐる。

本邦でも東洋製罐株式會社で新案出願中の家庭卷締機を發賣してゐる。

今回予等の新たに考案したガラス蓋罐詰は本邦獨特のもので、その特長とする所は、罐詰内を極めて強い低壓となし得る事と、外部から内容物を透視することが出來る點である。勿論特殊の罐を必要とするものであるが、その方法は至つて簡易で、それに要する機械も僅一個二圓内外で出來、殺菌釜は家庭にあるものを利用し得らるゝ。

又輸送に堪ゆるゆゑ、農村、漁村の副業としても適當である。

補充文には都市用讀本の中から『バクラリヤ』をあげておきませう。

バクテリヤ

バクテリヤは極めて微細な生物で、顯微鏡を用ひなければ見ることが出來ない。其の最も微細なものに至つては、數千倍以上に擴大しても、なほ之を見ることが出來ないものもある。

バクテリヤには、球狀のもの、短い圓柱狀のもの、螺旋狀のものがあつて、形は一樣でない。其の繁殖は大概自體の分裂によるもので、外界の事情が最もこれに適するときは、約二十分乃至三十分毎に一回の分裂をする。今一時間毎に一回の分裂をするものと假定しても、一箇のバクテリヤは一時間後に二箇となり、二時間の後には四箇となり、三時間の後には八箇となり、一晝夜の後には千六百七十七萬七千二百十六箇の大數となる。斯うして五日の後になると、其の容積は全世界の海洋をもうづめるくらゐになるであらう。しかし實際にはこんな大繁殖をする餘地もなく、又榮養分も之に伴はないから、終には其の分裂を止めるやうになるのである。

バクテリヤは到る處に生存してゐる。其の人體に寄生するもの〻中には、無害のものもたくさんにあるが、コレラ・腸チフス・ヂフテリヤ・ペスト・結核等諸種の傳染病の原因をなすものもある。是等のバクテリヤは、實に人類の强敵といつてもよい。けれども健全な身體にはいつては繁殖することが困難なものであるから、我等は常に身體を健全にして、其の暴威をたくましうする餘地がないやうにすることが肝要である。

バクテリヤは其の種類が甚だ多く、中には何等の害を及ぼさないばかりでなく、却つて人類の益を爲すものも少くない。酢、醬油、味噌、納豆などは醱酵によつて作られる食用品で、此の種醱酵の作用は、バクテリヤの力による。又バクテリヤの中には、地中に繁殖して植物の生育を助けるものもある。

物の腐敗するのは、バクテリヤの作用であつて、我等人類の不利益となることが多いけれども、若し世に腐敗といふことがなかつたらば、果してどんな結果を見るであらうか。太古より今日に至るまで死滅した生物の屍は、地球上到る處に累々として、慘澹たる光景は實に見るに堪へないであらう。幸にして此の慘狀を見ないのは、主にバクテリヤの功といはなければならぬ。

第二十六課　川柳

卷二に俳句を出し、こゝに川柳を出してをります。これで川柳の如何なるものかを、さつと一通り知らせやうと云ふのであります、川柳も國風の一つです。

川柳は德川時代の末期に生れた文學で、滑稽洒落を詠出した一種の詩形です。前句附きの一轉したもので、人世の弱點を指し世態の缺陷を突くのを旨として、特に着想の奇拔を尊びました。其の形式は俳句と同じく五七五の十七字からなつてゐるのが普通ですが、中には七七五又は五七七などの句からなつてゐるのもあります。俳句とは全然其の趣を異にして切字季などの約束は一切ありません。前句附はもと俳諧の附句から出た一種の文學的遊戯で、點者から前句を出して多くの人に幾句にても隨意に附句をさせるものでした。初めは多く京阪地方に行はれましたが、貞享元祿の頃から江戸にも盛に行はれ、寶曆の頃から前句附の附句は一句立てとして作られる新傾向を生ずるに至り、四時庵紀逸の選六玉川・燕都枝折の如きは當時の附句の中から面白い句ばかりを選り出してゐました。其の頃前句附の點者に柄井川柳と云ふ人があつて、前句附の點者として

群を抜き、流行日々に盛んになりましたが、夙に其の機を察して附句の一句立を唱へ、前句附は附句ばかりで十分面白く傳へられるものだと唱へ出して、明和二年に初めて俳風柳樽初篇を出して、前句附の中から句意の獨立したもので巧みに人世の弱點を捉へ皮肉な諷刺を試みたものを選んで載せました。柳樽の中の句には一切作者の名を書いてゐませんが、其の中には無論川柳の作も編入されてゐるのであります。それから年毎に一冊宛刊行し、其の風調市井の間に大に行はれました。又當時別に柳多留拾遺・末摘花など同樣の小冊子も出版されました。川柳は元の名を其の儘に之を前句と稱して、別に新しい名を擇びませんでしたが、川柳の點じた句であるからして、世に之を川柳點と言ひ、略して川柳ともいひ、又其の體の句をも川柳と言ひならはすやうになりました。寛政二年に川柳が歿して後、點者互に相軋轢して隨所に萬句合を興行し統一する所がありませんでしたが、和笛老人が斯道絶滅を憂へて柳樽二十五篇から二十九篇迄を編次し、尋いで花落庵一口・門柳などが又其の後を受けて四十六篇に及びました。其の後二代川柳・三代川柳相繼いで年々柳樽を續刊しましたが、年を經るに從つて漸く左道に入つてしまつたのを、文政七年に四代川柳が其の後を繼いで點者たるに及んで、早くもこゝに着眼して川柳の本領は人世の眞理を活寫し、寸言寸鐵を以て人の腸を抉り、或は人の顔を解くことを說き、又前句を廢して、初から一句で句意の獨立した滑稽を詠出することゝして、之を俳風狂句と改め稱しました。こゝに於て斯道が又世に盛んになり之を川柳中興の祖とします。五代川柳に至つて偶々天保の改革に會ひ、風俗に關するものは一小冊子でも嚴に處罰されることになりましてから、川柳も自から大に戒めて柳風新式を定め、其の諷調は特に心學を旨とし敎訓人を善に導かんことを專らとし、忽ち興味索然たるものと化し去りました。其の後改革の新政は廢れましたが、狂句川柳は再び舊勢に復し難く、其の風調年を追ふて左道に入り卑陋に傾き、僅に其の餘喘を保つに過ぎませんでした。降つて明治三十四五年の頃に至り、阪井久良岐・井上劍花坊・岡田三面子などが出て舊體の復興に努め、又新觀察法に依つて新事物を詠出して茲に新生面を啓きましたが、其の風調輕洒にして人情の委曲を悉し、世態の變化を穿つに妙を得てゐましたので、狂句川柳は再び其の流行を極めんとする傾向を呈するに至りました。

川柳の始祖柄井川柳は、通稱八右衞門、名は正通、別に綠亭・無名庵などゝ號し、江戸淺草阿部川町の名主です。寶曆から明和に掛けて、前句附の點者中最も流行した人で、月々萬句合の刷物を出して居りました。其の刷物の體裁が伊勢曆に類してゐたところから世に之を曆刷又は曆板の前句附とも言ひました。川柳は夙に前句附の附句を單行せしあんことを唱へ、明和二年に初め

て一句で句意の分り易いものを撰んで、俳風柳樽初篇を出しました。ところが其の風調大に市井に行はれ世に之を川柳點と言ひました。初め柳樽の外に川傍柳・柳筥など同種の書を出版しましたが、獨り柳樽ばかりが世に流行して今日に至るまで其の名を擅にするに至つたのであります。寛政二年の九月二十三日に、年七十二を以て歿しました。淺草榮久町龍寶寺に葬りました。『風やあとで芽をふけ川柳』は其の辭世の句なのであります。本課に出てゐる川柳も大部分此の柳樽の中から撰び出してあります。

武藏坊とかく支度に手間がとれ

辨慶が七つ道具と云ふ厄介な物を背負つてゐるところを諷したものです。斯うして一面に物持が支度に際取る世態を諷しようと云ふのであります。柳樽初篇に出てゐる川柳です。

義貞の勢はあさりを踏みつぶし

義貞の至誠神に通じて、稻村ケ崎十八町は俄に干潟となりました。寄手の大軍はどし〳〵進擊します。鎌倉方の周章狼狽は言ふまでもありません。が、それよりも尙ほ一層面くらつたものは其の汐の引いた處を棲家にしてゐたあさり貝であつたらうと云ふ、川柳氏獨特の見付どころが如何にも奇拔です。

尊氏はとはうづもなく逃げて行き

尊氏が九州落を諷したもので、『とはうづもなく』の一語がよく利けてをります。

間を見ては畠をせゝる渡守

おうい、おうい、船頭さん何にしてる。

おや〳〵、また今日も畠をせゝつでゐる。あの男にも困つたものだ。——

これもよくある圖です。

のんきな渡守、いつまでも待たされるお客さん、そこらに云ふに云へない可笑味があります。

氣のむいた所へ芽を出すつくね芋

つくね芋は佛掌薯で、『みねいも』とも『やまといも』ともいふ。薯預科、薯預屬の多年生草本、

家山芋の一品屬、地下の塊根は扁平なる不正の魂狀をなし、やゝ人掌狀又は生薑の根莖に似てゐる。葉腋に小球狀の珠芽を生ず。我が國各地の園圃に栽培せられ、塊根及び珠芽を食用に供す。

これはつくね芋がまがりくねつて、氣儘な方へ芽を出すところを狙つたもので、『氣のむいた』とおいたところに云ひ知れぬ味があります。

道問へば一度に動く田植笠

恰度田植頃で、田の中には男や女や澤山の人が頻に苗を植ゑてゐる。通りかゝつた旅人が道を問ふと、植ゑてゐた人達がみんな一緒に顏を上げて、問はれた道を指差したと云ふのであります。『一度に動く』に田舍人の純朴さが能く現はれてをります。

寢て居ても團扇の動く親心

母親が赤坊に添乳をして寢かし付けてゐるうちに、自分もついうと〳〵と寢てしまふ。しかし子供の爲に風を送つてゐた團扇の手は、やつぱり無意識に動いてゐると云ふのです。如何にも情の籠つた句なのです。

菜畠のなほ〳〵書に蕎麥の花

『なほ〳〵書』は『尙尙書』で、追而書ともいふ。冒頭に尙尙と書くよりいふ。追啓、二伸、二白、などに同じい。

この句は春の野の景色を面白くいつたもので、菜の花が一面に咲いて、もうそれだけで十分であるのに、かて〻加へて蕎麥の花までが、そのあひだ〳〵に點綴して一層の美觀を添へてをるといふのである。それを『なほ〳〵書』といつたところにこの句の生命がある。

西鶴の一代男に、

『書き續けてもはや鳥の子も無いと申されければ、然らばなほなほ書きをと望みける。』

といふのがあり、

狂言に

『一つ飲うで庵太郎にささうか、それは尙尙有りがたう御座る。』

といふのがある。これもこの句と同工異曲です。

よつぴいてひやうと放たぬ案山子かな

『よつぴいて』は『よく引いて』の音便で、弓を十分に引きしぼることです。

保元物語の白河殿夜撃の條に、

『爲朝「一定彼奴は引き設けてぞ云ふらん。一の矢をば射させんず。二の矢を交はん所を射落さんず。同じくば矢の溜らん所を、わが弓勢を敵に見せん」と宣ひて、白葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、驅け出でゝ「鎭西八郎これに在り」と名のり給ふ所を、もとより引き設けたる箭なれば、弦音高く切つて放つ、御曹子の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を交ふ所を、爲朝能つ引いてひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺尻輪懸けて、矢先三寸餘ぞ射通したる。暫は矢にかせがれて溜るやうにぞ見えし。卽ち弓手の方へ眞倒さまに落つれば、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳せ行けば、下人つと馳せ寄り、主を肩に引つ懸けて、御方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、いよ〳〵この門へ向ふ者こそなかりけれ。云々』

とあり、

平家物語の那須與一が遠矢の條に、

『與一、目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮那須湯泉大明神、願くばあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り、自害して人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな」と、心の中に祈念して、目を見開きたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、能つ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓はつよし、鏑は浦響くほどに長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷を叩きて感じたり、陸には源氏箙をたゝいてどよめきけり。』

などあるのがそれで、この句もそこらを狙つて、それを案山子に持つて來たところに奇想天外の趣があります。しかも『よつぴいて』と大袈裟に出て、『ひやうと放たぬ』と受けて、ひよつこり力を抜いたところに川柳一流の滑稽味があります。

黒犬をちやうちんにする雪の道

雪の夜道の有様で、黒い犬を提灯にしたと云ふのです。犬を提灯にすると云ふところに、一寸可笑味があります。

犬を見て猫は脊中へ腹をたて

猫と犬とが喧嘩してゐる有様を見て詠んだ句で、『猫は脊中へ腹をたて』がよく利けてをります。犬を見てフウツ〳〵と脊中を突立てゝ怒つてゐる猫の有様が見るやうです。

いゝ着物着ると内でもかしこまり

大人と見ても面白いが、やはり小供を詠んだ句とした方が面白いと思ひます。いつも腕白ばかりしてゐる子供が、晴着を着せられると、何時になくかしこまつてゐるといふのです。子供の常習をうまく句にしたところに言ふに言へない味があります。

知つた人ばかり强ひる子の給仕

子供の氣持が能く出てをります。能くある事で、ズラリと竝んでゐるお客さんの中で、知つた人の所へ許り給仕に出て、見知らない人の前は素通りする。子供の遣りさうなところを旨く捉へたところに此の句の面白味があります。

いゝ所へ來たと脊高使はれる

脊丈の低い人が棚の上を見上げて、『あゝ、困つたなぁ』と澪してゐるところへ、ちやうど遣つて來た脊丈の高い男、……『オ、好い所へ來た、あれを取つて呉れ』……これも能くある圖です。

人を汲出して井戸がへしまひなり

ヤアレ引いた……ヤアレ引いた……ガラ〳〵ざぶり、ヤアレ引いた、ヤアレ引いた、ガラガラ〳〵ざぶり……井戸の中から合圖をすると、井戸側にゐる人が頻に綱を引く、其のうちにスツカリ、井戸がへが出來てしまうと、井戸の中で働いてゐた男が桶の中へはいつて上つて來る、井戸がへの殿（しんがり）は井戸の中にはいつてゐた男です。『人を汲出して』が能く利けてをります。

補充文には矢野文雄氏の『川柳點』を擧げておきませう。

川柳點

今年こそ大晦日には早く仕事をしまひ、ゆつくりと年を取るべしと、何れの家も大晦日には其の心掛をなせども、何がさて一年の終の日とて、折角に外向の用を濟ませば、家内の用向、元日の支度に、とう〳〵夜に入りて、大騒のうちに舊年、新年の境目なる十二時の時計は鳴つて、舊年の終の事を爲しつゝ、はや既に新年に入るの類は、何れの家も珍しからぬと見え、古き川柳にも、

据風呂に下女が入るうち春になり

蓋し、家内總じまひの殿として、下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐることゝ見えたり。昔も今も變らぬものは此等の有樣なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

むべ山のなかに嵐の年始客

これも實際有りさうなることなり。又曰く

歌がるた人と云ふ字に手が五つ

此等も昔の句ながら、今も同樣、カルタの句の頭字の人と云へるには、五つどころか。一時に十の手も出づべし。又曰く、

一日の御慶炬燵へ取りよせる

旦那樣歸宅の後、夜分に入り、『どれ〳〵新年の名刺を持て來よ』と言ふのは、何れの家も似たるものなるべし。又曰く、

上るなと言はぬばかりの帳を出し

これは、今の若き人には分らぬやも知れず。今ならば左の如く言ふを可とす。

上るなと言はぬばかりの箱を出し

これは、名刺入れの箱と知るべし。又曰く、

嫁の出るまではまだるい歌がるた

佳興に入る頃は、若き嫁さん迄一座に飛入る。カルタの花の盛なるべし。又曰く、

欞子に同居駒下駄と福壽草

これも町家の狭き處には、往々見掛くる實景なり。

凡そ川柳は、突如として來り、初より其の題を言はぬところに妙味あり。

芭蕉は飛込み道風は飛上り

若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべし。其の出し拔なるところ面白し。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

の如き有名なる句も、其の突如として出づる處に妙あり。

釣りなどもしてみる馬鹿な軍學者

常に文王が來るとは限らず。太公望氣取りの軍學者も困りものなり。

其の暗さ隼太櫻に突當り

まさかに暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあるまじけれども、何かなしに可笑し。

右の諸句は、川柳として品のよき方なり。若し其の秀逸と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆尾籠千萬にて、士君子の間に語り難きもののみ。其の愈々尾籠なるほど、其の特色益々著し。

若し川柳をして尾籠千萬の境より脱せしめば、蓋し詩歌中の珍ならん。

第二十七課　待賢門の戰

平治物語の中の名文として、誰知らぬ者もない待賢門の戰です。場所は御所の大庭、人は惡源太義平と左衛門佐重盛、彼は源家の嫡男、これは平家の嫡子、義平は十九歳、重盛は二十三歳、まるで繪でも見てゐるやうな花やかさです。戰爭もこゝまで行けば立派な詩です。

待賢門の軍附信賴落つる事　（平治物語）

さる程に六波羅の皇居には、公卿僉議あつて清盛を召されけり。紺の直垂に、黑絲威の腹卷に、左右の小手を差して、折烏帽子引き立てゝ、大床に畏る。頭中將實國を以て仰せ下されけるは、王事もろきことなければ、逆臣滅びんこと疑なし、但し適新造の內裏なり。若し回祿あらば朝家の御大事たるべし。官軍僞りて引き退かば、凶徒定めて進み出でんか。然らば官軍を入れ替へて、內裏を守護させ、火災なき樣に思慮あるべしと、仰せ下されければ、清盛畏つて、朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の內に候ふ間、時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難儀の勅定にて候へ。さりながら范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を滅せしも、皆これ智謀の致す所なれば、汎分武略を廻らして、金闕無爲なる樣に成敗仕るべしと奏して出でられけり。主上御坐あれば皇居の御固に清盛をば留めらる。大內へ向ふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守賴盛、淡路守敎盛、侍には筑後守家貞子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀨尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞景を始めとして、都合その勢三千餘騎、六波羅を打ち出でゝ、賀茂河を馳せ渡し、西河原に控へたり。左衛門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑の緒を締めて、小烏と云ふ太刀を帶き切文の矢負ひ重籐の弓持ちて、黃桃花毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲張良が勇をなさゞらんとて、三千餘騎を三手に分けて、近衛、中御門、大炊御門、大宮表へ打ち出でゝ、陽明、待賢、郁芳門へ押し寄せたり。大內には三方の門を鎖し固め、表をば開かれたり。昭明建禮の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬共多く引き

立てたり。梅壺、桐壺、麗壺、紫宸殿の前後、東光殿の脇の壺まで、兵ひしと竝み居たり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流打ち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流差し揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨を咄と作りければ、大內も響き渡りて夥し。鯢波に驚きて、只今まで由々しく見えられつる信頼卿、顏色變りて草葉の如くにて、南階を下りられけるが、膝振ひて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと引き寄せたれども、太り責めたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心にも似ず、逸り切つたる鴻物なれば、つと出でんつ出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、斯くやと覺ゆる計にて、乘り兼ね給ふ所を、侍二人つと寄つて、『疾く召し候へ』とて押揚げたり。餘にや押したりけん、弓手の方へ乘り越して伏樣にどうと落つ。急ぎ引き起して見れば、顏に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日比は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、『あの信頼と云ふ不覺人は臆したりな』とて、日華門を打ち出でゝ、郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押し拭ひ、兎角して馬に搔き乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。左衞門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百騎にて押し寄せて呼ばはり給ひけるは、

『この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。斯く申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳淸盛が嫡子左衞門佐重盛。生年二十三』と名のり懸けければ、信頼返事にも及ばず、『それ防げ侍共』とて引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、われ先にと逃げければ、重盛彌勇みて大庭の椋の木の下まで攻め附けたり。義朝これを見て、『惡源太はなきか。信頼と云ふ大臆病人が、待賢門を早破られつるぞや。かの敵追ひ出せ』と宣ひければ、『承り候ふ』とて驅けられけり。續く兵には鎌田兵衞、後藤兵衞、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を雙べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて『この手の大將は誰人ぞ、名のれ、聞かん。かく申すは淸和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳。武藏の大藏の軍の大將として、叔父、帶刀先生義賢を討ちしより以來、度度の合戰に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せん』とて五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し竪樣横樣十文字に、敵をさつと蹴散らして『葉武者共に目な懸けそ、大將軍を組んで擊て。櫨の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押し雙べて組んで落ち、

手捕にせよ』と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍共、興三左衞門、新藤左衞門を始めとして、百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太を始めとして、十七騎の兵共、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まん〳〵とぞ揉うだりける。十七騎に驅け立てられて、五百餘騎叶はじやと思ひけん、大宮表へさつと引く。大將左衞門佐は、弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、『曩祖平將軍の二度生まれ替り給へる君かな』と、向樣に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんやと思はれけん、前の五百騎をば留め置き、荒手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻め寄せたり。又惡源太驅け向ひ見廻して云ひけるは『只今向ひたるは皆荒手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於いては餘すまじ。押し雙べて組んで捕れ、兵共』と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎、瀨尾太郎、伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太弓をば小脇に搔い挾み、鐙踏ん張りつゝ立ちあがり、左右の手を擧げ『幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、寄れや組まん』と云ふ儘に先の如く大庭の椋の木の下を追ひ回して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで、敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、『須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵度々驅け入るらめ。あれ速に追せ出せ』と云ひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由を云ふに、『承り候ふ、進めや者共』とて、色も替らぬ十七騎、大宮表に驅け出でゝ、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引き立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下に二條を東へ引きければ、わが子ながらも義平は能く驅けたるかな。あ驅けたりとぞ譽められける。大將重盛、興三左衞門景安、新藤左衞門家康、主從三騎懸け放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田に屹と目合はせて、『こゝに落つるは大將とこそ見れ、返せや』とて、追つ懸けたり。既に堀河にて追ひ詰めけるが、弓手の方に材木多く充滿たるに、惡源太の乘り給へる馬、かたなつけの駒にや材木にや驚きけん、馬手の方へ蹴飛んで、小膝を折りてどうと伏す。鎌田兵衞延ばさじと、十三束取つて交ひ、能つ引いてひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛び返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、箙かつぎ碎けて跳り返れり。惡源太『これは聞ゆる唐皮と云ふ鎧ござんなれ。馬を射て落ちん所を擊て』と下知せられければ、又能つ引いて、追樣に筈の隱るゝほど射込みたり。馬は屏風を返す如く倒る

れば、材木の上に跳ね落され、冑も落ちて大童になり給ふ。鎌田、堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと落ち合ふ。重盛近附けては叶はじとや思はれけん、『弓の弭にて鎌田が冑の鉢をちやうと突く。突かれてゆらゆる間に冑を取つて打ち着つゝ緒を強くこそ締められけれ。與三左衛門馳せ寄つて、中に隔り申しけるは、『漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱しめらるゝ時は臣死すと云ふに非ずや。景安こゝに在り、寄れや組まん』と云ふ儘に、鎌田兵衛と引き組んで取つて押さへける處に、惡源太馬引き起し、これも堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと飛んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや擊たんと思案しけれども大將には又も寄せ合ふべし、政家を擊たせては叶はじと思ひ、與三左衛門に落ち合うて、三刀刺して首を取る。重盛は憑み切つたる景安擊たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衛門馳せ來り、『家泰が候はざらん所にてこそ大將の御命をば捨て給ふべけれ』とて、わが馬を引き向け、中に隔てゝ惡源太とむずと組む。正家は重盛に組まんとしけるが、主を擊たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落ち重つて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。十二月二十七日の巳の刻ばかりの事なるに、一叢雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも、氷柱いたれば乘りかねけり。惡源太これを見給ひて『手形を附けて乘れや』と宣ひければ、打物拔いて、つぶ〳〵と手形を切つてぞ乘りたりける。鞍に手形を附くる事、この時よりぞ始れる。三河守頼盛は都芳門へ押し寄せて、『この陣の大將は誰人ぞ、名のられ候へ』と宣へば、『この手の大將は清和天皇九代の後胤、左馬頭源朝臣義朝』と名のつて、『惡源太は二度まで敵を追ひ出すそかし。進めや、若者』と宣へば、中宮大夫進右兵衛佐新宮十郎、平賀四郎、佐渡式部大輔重成を始めとして、われも〳〵と驅けられり。右兵衛佐頼朝は生年十三と名のつて、敵二騎射て落し、一騎に手負はせて、殊に進みて驅けられけり。左馬頭宣ひけるは、何と云へども若者共の軍するは疎に見ゆるぞ、義朝驅けて見せんとて、眞前に進まれければ、一人當千の兵共、打ち圍みてぞ戰ひける。頼盛暫く支へけるが、門より外へ追ひ出さる。義朝續いて攻め戰へば、大宮表へ引きにけり。平家馬の息を繼がせて驅け入りければ、源氏大内へ引き籠る。源氏又馬の足を休めて驅け出づれば、平家又大宮表へ引き退く。平家は赤旗赤符、日に映じて輝きけり。源氏は大旗、腰小旗、皆押し竝べて白かりけるが、風に吹き亂され勇み進める有樣は、賊にすさまじくこそ覺えけれ。源平の兵共互に命を惜しまねば、眼前に擊たるれども顧みず、

主の先に進まんと、こゝを先途と戰うたり。惡源太、左衞門佐をば擊ち洩らし、鎌田に向つて宣ひけるは、郁芳門の軍は如何あらん、いざや頭殿の御前仕らんとて、打ち具して馳せ來り、又眞前にぞ進まれける。こゝに鎌田が下人、八町次郎とて、大力の剛の者早走の手利あり。馬にてこそ具すべけれども、なか〳〵徒立好かるべし。高名せよと云ひければ、一年も腹卷に小具足差し堅めて、眞前に進みたりけるが、敵の馬武者の遙に先立ちて落ちけるを、八町が內にて追ひ詰めて首を取りたりければ、それよりして八町次郎とぞ云ひける。されば又この者三河守の聞ゆる早馳の名馬に、兩鐙を合はせて驅けられけるに、少しも劣らず追つ付きて、冑の頂邊に熊手を打ち懸けん、打ち懸けんと、續いて走りければ、賴盛も冑を打ち傾け打ち傾け、あひしらはれければ、五六度は懸け脫しけるが、終に頂邊に打ち懸けてえいやと引けば、三河守既に引き落されぬべう見えられけるが、帶いたる太刀を引き拔いてしと〻切る。熊手の柄を手本二尺ばかり置きて、つんと切つて落されければ、八町次郎、のけに倒れて轉びけり。京童これを見て、あはれ太刀や、あ切れたり、三河殿も能く切つたり、八町次郎も能く懸けたりと感じける。賴盛は冑に熊手を切り懸けながら、取りも捨てず見も返らず、三條を東へ高倉を下に、五條を東へ、六波羅までからめかして、落ちられけるは、なか〳〵優にぞ見えたりける。名譽の拔丸なれば、能く切れけるは理なり。この太刀を拔丸と云ふ故は、故刑部卿忠盛、池殿に晝寢しておはしけるに、池より大蛇上りて忠盛を呑まんとす。この太刀、枕の上に立てたりけるが、自らするりと拔けて蛇に懸れば、蛇恐れて池に沈む。太刀も鞘に返りしかば、蛇又出でゝ呑まんとす。太刀又拔けて大蛇を追ひて、池の汀に立ちてけり。忠盛これを見給ひてこそ拔丸とは附けられけれ。當腹の愛子に依つて、賴盛これを相傳し給ふ故に、清盛と不快なりけるとぞ聞えし。伯耆國、大原眞守が作と云々。三河守を落さんと防ぎ戰ふ侍には大監物、小監物、藤左衞門尉助綱、兵藤內が子、藤內太郎家繼を始めとして、われも〳〵と戰ひけり。兵藤內家俊は、元より大臆病の覺取りたる者なりけるが、大勢の中に蹴立てられて、心ならず馳せ行きけるが、馬を射させて幸とや思ひけん、小屋の內へ逃げ入りぬ。その子、家繼は父には似ず大剛の者にて、散々に戰ひ、敵數多擊ち取つて引きけるが、父が馬は射られて伏しぬ。主はなし生捕られにけりと無念なれば、家繼、生きて何かせんとて、只一人取つて返し、多くの敵を斬り伏せて、或る兵と引き組んで落ち、刺し違へて死しけるを、小屋の內にて見居たれば、心憂く悲しくて走り出でんとは思へども、戰場なれば怖しくて、子の擊たるゝを見續がさりけり。後日に六波羅へ參りけるを見て、惡

まぬ者ぞなかりける。平家は勅諚に任せて皆六波羅へ引き返す。源氏は謀とも知らざりけるにや、内裏をば打ち捨てゝ追ひ懸け追ひ懸け戰ふ。その間に官軍を入れ替へて門々を固め防ぎければ、源氏内裏へは入り得ずして、そゞろに六波羅までぞ寄せられける。齋藤別當と後藤兵衛とは、多くの敵を追ひ返して、東三條に控へたるに、武者二騎馳せ來れり。實盛先づ一騎の武者に驅け合はせ、我君は誰ぞと問へば、『安藝國の住人、東條五郎』と名のる所を、能つ引いて射落し、その首を取りて、これは如何に後藤殿と云へば、實基も一騎の武者に馳せ向ひ、御邊は誰ぞと問へば、『讃岐國の住人、大木戸八郎』と名のりも果てねば、しゃ首の骨射て落し、その首取つて、『これ見給へ齋藤殿、頭殿の見參にや入る、捨てやする』と、云ひければ、今朝より乘り疲らしたる馬に、生首附けて何かせん、いざ捨てんと云ひけるが、二條堀河まで馳せ來り、材木の上に二つの首を差し置きて、軍見ける在地の者共に預けて、この首失ふべからずと云ひ含めて驅け出づれば、失うては惡しかりなんとて、日暮まで振ひ〳〵守りけるなり。右衛門督信頼は、今朝待賢門を破られて後は、軍の事は思ひも寄らず、隙を求めて落ちん〳〵とぞせられける。義朝驅け出でゝ後は、大内にも忍びずして、御方の勢の跡に附きて怖づ〳〵河原まで出でられけるが、六波羅は寄せずして、河原を上に落ちられけり。金王丸これを見て、『右衛門督殿こそ落ちさせ給へ、追ひ懸けまゐらせん』と申せば、義朝『只置け、あれ體の不覺人なればなかなか軍がせられぬぞ』とて、河原を下にぞ寄せられける。

重盛の出立、義平の武者振、何と云ふ花やかさでせう。讀本の文は程度の調節をはかつて、餘程縮約されてゐますが、しかし原文の趣は遺憾なく發揮されてをります。

文は四段に分れ、第一段は戰の序幕で兩軍の勢揃へ、第二段は重盛の挑戰と義平の應戰、第三段は重盛と義平の一騎打、第四段は義平の奮戰と其の武者振となつてをります。

『左衛門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、云々』

この段は兩軍の勢揃へです。

頃は平治元年十二月二十七日、辰の刻(午前八時)ばかりのこと、昨日の雪も消え殘つて、内裏の夜はさながら玉を敷いたやうに美しく、武士たちの鎧の金具がきら〳〵と朝日に輝きわたつて、如何にも美しう見えました。

信頼初め、源義朝以下、平家の軍勢おしよせなば、一もみにもみつぶしてくれようと待構

へてゐました。

寄手の大將左衛門の佐重盛は、生年二十三、赤地の錦の直衣に櫨匂ひの鎧、龍頭の冑の緒をしめ、小烏と云ふ太刀をはき、切文の矢負ひ重籐の弓を持つて、黄月毛の馬に、柳櫻を織り交ぜた鞍を置いてゆつたりと乘り、三千餘騎を引連れて堂々と乘込んで來ました。

『左衛門佐』　左兵衛府の次官、

『陽明』　大内裏の東方の門の一、

『待賢』　大内裏の東方の門の一、陽明門の南にある。

『郁芳』　大内裏の東方の門の一、待賢門の南にある。

『大庭』　御所の大庭、即ち紫宸殿前の大庭、向つて右に櫻があり左に橘がある。

『重盛は、手兵五百騎を率ゐて、信頼が守れる待賢門に向ひ、大音聲に呼ばはりけるは、云々』此の段は重盛の挑戰と義平の應戰です。

重盛味方の軍に打向ひ、

『年號は平治、都は平安、我等は平氏、味方の勝利疑ひないぞ』と味方の軍を勵まして、三千の軍を三手に分け、陽明、待賢、郁芳の三つの門へ押寄せました。

紫宸殿の大庭を初め、御所の大庭には源氏の軍勢がひし〳〵と居並び、白旗三十餘旒打立て、吹く朝風にヒラ〳〵と翻り、門の外には平家の赤旗三十餘旒朝日に照りはえて、燃え立つ樣な美しさ。

勇み立つた平家の軍勢三千餘騎、一度にどつと鬨の聲をあげれば、大内裏もゆるがん許りの物凄さです。

今までいかめしく控へてゐた信頼、急に顏色青ざめて草葉の如く、膝ふるわせて階段を降りかねてゐる見苦しさ、家來達に助けられて馬に乘らうとしたが、何しろ信頼は丸く太つた大男です。其の上初めて着けた大鎧、身體一つさへ始末のつかぬのを馬の上にかつぎ上げようとするのだから大變です。

主人の臆病にも似ず、馬ははやりきつた逸物です。家來達が七八人、しつかと轡を取つてゐますが、放したら天へも飛びさうな勢です。

『さあ、さあ早く召し給へ。』

と、大の男を押上げたはずに、力が少し過ぎたと見えて、弓手の方へ乘越して、どうとばかりに轉げ落ちました。

急いで引起して見れば、顏は一抔砂まみれ、鼻血がだら〳〵と流れ出て、泣くに泣かれぬ可笑さです。

やう〳〵鼻血押し拭うて馬に跨り、待賢門へ出掛けたが、とても役に立ちません。

左衞門佐重盛、五百餘騎を引連れて押し寄せ、

『此の門の大將軍は信賴卿と見受けたり、斯く申すは桓武天皇の後裔、大宰大貳淸盛が嫡男、左衞門佐重盛、生年二十三歲なり。』

と名のり掛けたから堪りません。

信賴返事も得せでおろ〳〵聲、『それ防げ侍共ッ』

と自分はもう逃腰です。大將に習つた侍共、我れも我れもと逃出すので、防ぐ兵士は一人もありません。

勝に乘つたる重盛は、勇みに勇んで椋の木の下まで攻寄せました。義朝之を見て、怒の聲物凄く、

『惡源太は居らぬか！　信賴と云ふ大臆病人が待賢門を破られたるぞ。あの敵早く追ひ出せ！』

『承知仕る！』

と駈け出でたる惡源太義平、練色の魚綾の直衣に、胸板に龍を八つほりつけたる八龍の鎧を着け、鹿の角の前立打つた高角の冑の緒をしめ、石切の太刀をひつさげ、重籐の弓を小脇にかいこんで、逸り切つたる鹿毛の駒に打乘つて駈け出でました。

つゞく兵には、鎌田兵衞、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平太、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎太夫、以上合せて十七騎、一粒選の荒武者です。

『手兵』　手下の軍勢、手のもの、『手勢』に同じ。

『大晉聲』　大いなる晉聲、おほごゑ、『大聲』に同じ。

『後裔』　數代の後の系統、子孫又は後胤に同じ、

『太宰大貳』　太宰府の次官、親王帥に任じて權帥なき時は大貳代りて專ら府務を統ぶ。

『嫡子』　よつぎ、あとつぎ、『嗣子』に同じ。
『生年』　生れたる年、うまれどし、この世に生れ出でゝより、
『惡源太』　源太は源氏の總領、惡は剛强の意、
『惡源太義平、大音聲を上げて、云々』
この段は重盛と義平の一騎打で、錦繪のやうな場面です。
『寄手の大將軍は誰人ぞ、名のれ聞かん、かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉の惡源太義平なり、生年十五歲の初陣より未だ一度も不覺の名をとらず、年積つて十九歲、見參せん！』
と呼びかけながら、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、竪横十文字に蹴散らし、踏み散らして荒れ廻ります。
『名もなき荒武者に目をかけるな、櫨の匂の鎧に蝶の裾物打つて、黃月毛の馬に乘つたるが大將軍重盛なるぞ、それ逃すな、重盛を生捕にせよ。』
義平初め十七騎、重盛一人を目がけて、

『組めや！　組めや』
と追つかけます。
大將軍を討たれては堪りません。組ませて堪るものかと平家の侍百騎ばかり、中にわつて入りましたが、どうすることも出來ません。
重盛を中にかこんだまゝ、大庭の椋の木を中にして、右近の櫻、左近の橘のほとりを、くる〳〵と七八回も逃げまはるのでありました。
十七騎に追ひまくられた五百餘騎、叶はじと思つたか、表の方へさつと引上げてしまひました。

『左馬頭』　左馬寮の長官、
『初陣』　始めて出陣すること、『初戰』に同じ。
『不覺』　油斷して失策すること、卑怯なること、未練なること、『不名譽』に同じ。
『見參』　面會、出會、對面などの敬語、
『端武者』　とるに足らぬ武者、はしざむらひ、こつぱむしや、『雜兵』に同じ。

『左近の櫻』紫宸殿の階下の左方にある櫻、左近衛府の擔任して培養するよりいふ。
『右近の橘』紫宸殿の階下の右方にある橘、右近衛府の擔任して培養するよりいふ。
『もみたりけり』擦り觸れて押し合ふ、入り亂れてせり合ふ、壓しつく、
『驅立てられ』馬を驅けて追ひたつ、かけちらす。
『重盛弓杖ついて馬の息をつがする所に、筑後守家貞つと參りて、云々』
此の段は義平の奮戰と其の武者振で、此の文の山です。

大將重盛、ほつと一息してゐるところへ、筑後守家貞が近寄つて、
『平將軍貞盛公のお生れがはり、あゝ天晴な武者振かな。』
と、ほめあげたので、も一度かけて、家貞に見せようと思つた重盛、新手の五百騎を引連れて、又もや大庭の椋の木まで押寄せました。
義平きつと之を見て、弓を小脇にかいばさみ、鐙ふんばりつゝ立ち上り、兩手をひろげて大音聲。
『我は源氏の嫡男なり、御身も平家の嫡男なり、丁度似合つた好敵手、いざ寄り給へ組討せう。』
名乘もあへず追つかけます。
此の荒武者に組み伏せられては堪りません。重盛は又大椋の周りを五六度まで、命の限りに逃げ廻ります。蹄の音がカツ〳〵と、後に迫つて聞えます。捕へられては一大事、馬の頭を立て直して又もや大富表へさつと引上げました。
後には惡源太義平は二度まで敵を追まくつたので、弓杖ついて馬に一息いれてゐるところへ、父義朝の怒り聲、
『やあ義平、汝が手ぬるく防ぐ爲、度々敵は攻め入るぞ、あれ早く追ひ出せ。』
との言付です。
『おゝ』と答へた惡源太、
『進めや者共！』と差圖して、表の方へ駈け出して、五百騎の中へ面もふらず割つて入りました。
大將義朝に叱られて、奮ひ立つた十七騎です。
此の度こそ逃しはせじと、何處までも何處までもと追つかけます。

大宮表を下りて、二條通のあたりを砂烟あげながら追つかけて行く後姿の勇しさ、

義朝はるかに見送りながら、

『我が子ながらも源太はよく駈けたり、あゝ駈けたり〳〵。』

と打ちほゝ笑みました。

まるで繪を見るやうな戰です。

『弓杖』　弓を杖とすること、弓をつゑづくこと、

『あつぱれ』　歎美する時、發する詞、天晴、

『平將軍』　平貞盛をいふ。

『新手』　未だ戰はずして、疲勞せざる軍隊、

『小脇』　小は接頭語、脇といふに同じ。

『鐙』　馬具の名、鞍の兩脇に垂れて、乘る人の足を踏みかくる具、

『不覺に防げばこそ』　十分に防がず粗漏の防ぎ方をすればこそ、

『面もふらず』　あたりをふりむきもせず、傍見もせずまつしぐらに、

『浮足立つたる』　足の一所に落ちつかぬこと、足もと定らず、逃げ腰になること、

『馬の足を立てかねて』　馬の足をふみ留め防ぎかねて、

『驅けたるものかな』　よく戰つたと感心していつたもの、『驅けた』は『驅け散らした』の意で、馬を驅けて敵を追ひ散らすこと、

補充文には『保元物語』から『白河殿の夜討』をあげておきませう。

白河殿の夜討

白河殿にはかくともしろしめさりしかば、左大臣殿、武者所の親久を召されて、『內裏の樣見て參れ』と仰せければ、親久卽ち馳せかへり、『官軍旣に寄せ候』と申しも果てぬに、先陣旣に馳來る。その時鎭西八郎申しけるは、『爲朝が千度申しつるはここ候、ここ候』と忿りけれども力及ばず、爲朝を勇ませむ爲にや、俄かに除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、『これは何といふ事ぞ敵旣に寄せ來るに、方々の手分をこそせられむずれ、只今の除目物騷なり。人々は何にもなり給へ、爲朝は、今日、藏人と呼ばれても何かせむ、只もとの鎭

西八郎にては候はむ』とぞ申しける。

さる程に安藝守清盛は三條へうち下り、河原を馳渡し、堤を上りに北へ歩ませて、二條河原の東堤にぞ控へける。その勢の中より五十騎ばかり、先陣に進んで押寄せたり『こゝを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五・伊藤六』とぞ名乘りける。八郎これを聞き、『汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しく、なり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎭西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け』とぞ宣ひける。

景綱、『昔より源平兩家天下の武將として違勅の輩を討つに、兩家の郎等大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ參らせたる身なり。下郎等の射る矢、立つかたぬか、御覽ぜよ』と、能つ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず『合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しさに、矢一つ賜はらむ、受けて見よ。且つは今生の面目、又は後生の思ひ出にせよ』とて、三年竹の節近なるを少し押し磨いて、山鳥の尾を以て矧ぎたるに、七寸五分の丸根の、箟中過ぎて箟代のあるを打食はせ、暫く保ちてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五の射向けの袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にたりけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、『八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ』と申せば、安藝守を始めてこの矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、『かの先祖八幡殿、後三年の合戰の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、『君の御矢に中る者、鎧・兜を射通されず』といふ事なし。抑々君の御弓勢を慥かに拜み奉らばや』と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌々兵ども歸服しけりと申し傳へて聞くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖ろし』とぞおぢあへる。

かくロ々にいはれて、大將宣ひけるは、『必ず、清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か』とあれば、兵皆、『それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らむ。たゞ北の門へ向はせたまへ』といへば、『さも言はれたり。今は程なく夜も明けなむず、然れば小勢にて大勢駈立てられむも見苦しかりなむ』とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、

澤潟威の鎧に、白星の兜を著、二十四差したる中黑の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黃土器毛なる馬に乘り、進み出でて、『勅命を蒙りてまかり向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す樣やあるべき。續けや若者』とて駈出でられけるを、清盛これを見て、『有るべうもなし。あれ制せよ、者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。あやまちすな』と宣ひければ、兵ども前に馳せふさがりければ力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

爰に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの野猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、『さればとて、矢一筋に恐れて向ひたる陣を引くことやある、たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五度、我が手に取つても度度多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかかぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむとて駈けいづれば、『をこの功名はせぬに如かず、無益なり』と同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、『夜明けて後に、傍輩の、『いで矢目見む』といはむには、何とかその時答ふべき。然れば日頃の功名も失せなむ事の無念なれば、よしよし人は續かずとも、おのれ證人に立つべし』とて、下人一人相具して、黑革威の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に著、十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黑鞍置きて乘つたりけり。門前に馬をかけすゑ、『物そのものにはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人、山田小三郎伊行、生年二十八、堀河院の御宇、嘉承三年正月二十六日、對馬守義親追討の時、故備前守殿の眞先かけて、公家にも知られ奉りし山田庄司行末が孫なり。山賊・强盜を搦め捕る事は數を知らず、合戰の場にも度度に及びて高名仕りたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや』と申しければ爲朝『一定きやつは引儲けてぞいふらむ。一の矢をば射させむず、二の矢を番はむ所を射おとさむず。同じくば、矢のたまらむ所を、我が弓勢を敵に見せむ』と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置きて乘りたりけるが、かけ出でて、『鎭西八郎これにあり』と名乘り給ふ所を、本よりひき儲けたる箭なれば、弦音高く切つて發つ。御曹司の弓手の草摺を縫樣にぞ射切つたる。一の矢を射損じて二の矢を番ふ所を、爲朝よつぴいてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる、暫しは矢にかせられてたまる樣にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆樣に落つれば、矢尻は鞍に留まりて、馬は河原へ馳行けば、下人つと走寄り、主を肩に引掛けて身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、彌々この門へ向ふ者こそなかりけれ。

第二十八課　兒島農場

兒島農場は岡山縣兒島郡藤田村にあつて、大阪の豪商藤田組の經營に係る模範的開墾事業で、現に日本一と推稱される一大干拓事業であります。兒島灣總面積七千町歩の內、五千町歩を開墾して一大農場を建設しようといふ計畫であつて、これを第一期第二期に分ち、第一期の事業は既に完成してこれを農場經營に移し、總面積一千七百町歩、これを高崎、大曲、都、錦の四農區に分割し、現に兒島農場としてその名を天下にうたはれてをります。藤田村は以上の四農區によつて組織された一村で、純農村自治の範を示し、村會議員の如きも、半數は農業從事者側より選出し、半數は事業經營者側より選出して、理想的勞資協調の大團體を形づくつてをります。

農場の大體及びその經營の一般は、辱知樫田三郎氏の『斗米遺粒』に盡してをります。參考のため同書中、兒島農場に關係した部分を左に摘錄しておきませう。

日本一の模範的開墾事業

——藤田組の經營、兒島灣の埋立——

是實に大阪藤田組の經營に係る大事業にして兒島灣總面積七千町歩の內五千町歩を開墾して農業經營を爲さんとするものなり。之を第一、第二の二期に區分し、第一期は既に完成して之を農業經營に移し、其總面積は一千七百町歩なり。之を高崎、大曲、都、錦の四農區に分割し下記三節の農法に區分經營しつゝあり。經營には事務方面を別として悉く農學士中の優秀なる手腕家を採用し、十年以前より農學士長谷川悌次氏技師長として牛耳を執り、淺倉、田中等新進の手腕家學士目下孰れも星の如く打揃ひ、部署に從ひ農場の成績旭日の如く輝きつゝあり、而して以上の農區は今や藤田村の一村を組織し、純農村自治の範を示し村會議員の如きは半數は農業從事者側より、半數は事務家側より選出し、下に揭ぐる經營法と相待つて理想的勞資協調の大團體として發展しつゝあり。

直營分益農

本法は新規の方法に依る大農式の工業的農業にして、從來の方法とは全然其趣を異にしたる組織に成れるものにして、地主は資本を投じ作人は勞力を提供して新規發明に係る特種の機械力を應用して人力を省略し、一戸四町歩乃至五町歩の耕地を擔當耕作せしめ、其の生產

收益を地主と作人が相當なる歩合によりて分配するものにして、地主作人共に奮勵努力して生産能率を高め其の利益を相互に均霑すべく全然勞資協調の意味に成れるものにして、其方法を列記すれば大要左の如し。

作人一戸二人五分乃至三人の勞力を以て四町歩乃至五町歩の擔當耕作は從來の方法にては到底出來得べきものにあらず、然るに容易に之れを實行し得るに至りたるは、全く農業經營の新なる組織と新規發明に係る特種機械力の應用によりて人力を省略するが爲めに外ならざるものなり。

(1)用水の設備と排給の方法（此の費用は全部地主の負擔）

用水の供給と惡水の排除は稻作中最も多大の人力を要するものにして、之れは一切機械力と特種の方法によりて自由自在に用水の供給惡水の排除を爲し人力を省略したるものなり。

右は根本的の一大設備によるものにして用水路と排水路とは六十間の間隔を置きて交互に排列し、更に之れを横斷して中央に用水の本線を設け其の兩端には排水の幹線を置き用排水共に縱横の接續點には開閉自在の分水樋を設けて水の排給を自由ならしめ用水は常に田面より高く排水は之れに反し常に田面より低き水位と爲し水の新陳代謝を容易ならしめ居れり。

用水の貯溜池としては海岸堤防に沿ふ低地に廣大なる面積を有する貯水池を造り降雨出水の場合之れを貯溜し以て水源池とするの外、地方の餘水を收容して漑灌の補給とす。而して各農場毎に二ヶ所又は三ヶ所の特殊なる大形オープンタービン式ポンプを設備して灌漑排水共に其の必要に應じて運轉し人力を省きて逆算なきを期しつゝあり。

(2)耕種栽培（勞力及牛又は馬一頭並に鎌鍬等の如き小農具は作人の負擔）

耕種栽培は主として畜力を利用して人力を省略しあるも挿秧の場合は一時に植付の必要あるを以て止むなく他より臨時に人夫を雇入れ以て補充しつゝあり、而して此の雇勞力賃は收支計算の場合地主と作人の收益分配の割合により双方の負擔となるものなり。

(3)收納調製（機械器具は全部地主の負擔とし勞力は作人の負擔）

脱穀、乾燥、籾摺、調製等は總て新規發明の機械力を應用し人力を省略し居れり。本作業は作人各戸共同の經營になるものにして其の方法は稻の耕種栽培を終へ刈取結束の後各擔當耕地に於ける用水路緣の畦畔に堆積する迄は各作人の擔當作業とし之れより以後

は總て共同作業に移すものなり。

(イ)脫穀（機械は全部地主の負擔作人は此作業に要する直接費たる脫穀、乾燥籾摺調製迄の費用を約反當一斗とし其の二分五厘を負擔す）

右は用水路の中に新規發明に係るBW式水上移動脫穀機を浮べて其の兩岸に堆積せる稻束を作人の擔當耕地毎に稻束のまゝ扱き落し、其の扱き落したる藁は其の耕地に於て直に堆積し更に又右機械は次の耕地に容易に移動して順次作業を進捗せしむるものなり。而して其の扱き落したる籾は完全に撰別せられ其耕地に於ける作人の眼前に於て收量を檢定し之に傳票を附して農業場に送致するものなり。

此の脫穀機は僅々十分間に一反歩の稻を扱き落して完全に處理すると同時に、籾は立派に風撰せられて自然に一定の容器に流入し容積と重量とを一度に檢定すべき設備になれるを以て極めて人力を省略し得るものなり。

又從來は檢見法によつて擔當耕作の收穫量を決定せしも、之れには作人の不平もなしとせざりし事ありしも右發明の機械により作人が其耕地に作業しつゝ自己の擔當耕地に於ける收穫の實收額を正確に而も眼前に於て檢定することを得るものなれば、作人の心理狀態は甚だ良好にして又相互に不安の念を除去することを得たるものなり。

(ロ)乾燥作業（機械全部の設備は地主の負擔とす）

右は作業場中の生籾貯藏場に沿て第一より第六に至る連絡的乾燥機を設備し茲に農場內の各耕地より輸送し來りたる籾を『エレベーター』により自然的に第一乾燥機中に流入せしめ、漸次各室を幾多の回轉作用によりて輸送せられつゝある間に完全に乾燥作業を終了せしめたる後乾燥貯藏場に輸送せらるゝものなり。

從來之れは皆天日乾燥によりしものにして一農場に五千枚乃至七千枚の莚干を爲し多大の勞力を費したるものなり。此の作業は三日乃至四日間繼續せざるべからざるものにして、其間驟雨に遭遇する場合あるときは籾の濡るゝことは勿論乾燥用の莚まで濕りて更に乾燥せしめたる後にあらざれば、第一の乾燥作業を行ふこと能はざるが如き困難なることもありて豫定の工程に一大違算を生ぜしめ多大なる不利益と苦痛とを嘗め來りたるものなるが、右發明によりて之れを根底より排除することを得、爲めに多大なる利益を受くるに至りたるものなり。

右乾燥機は新規發明に係る特種のものにして生籾を『エレベーター』にて自然的に乾燥機中に入れ之れが流下の途中に於て特種の設備により籾自體が適當の間隔を置きて熱風の通過すべき『パイプ』を通りつゝ第二、第三、第四、第五、第六と順次乾燥機に入り幾多の回轉動作によつて輸送せらるゝものにして、其間籾自體にて自然的に作りたる『パイプ』中に熱風が強度の速力を以て籾の空隙を通過して乾燥作用を遂行するに違算なきを期したるものにして、籾には更に惡化作用を生ぜしむることなく理想的に最も完全に乾燥せしむるものなり。

(八)籾摺及調製作業（機械全部を地主の負擔とし勞力は作人より提供）

乾燥せられたる籾は貯藏場より直に『エレベーター』にて自然的に籾摺機中に流下して其の作業を終へ、幾多の撰別機を經て完全なる合格米となりて圓筒中より流下し直に俵の中に流入するものにして、此間總て機械力により全然人力を省略せるものなり。俵裝は人力を用ひて完成せしむると同時に倉庫に收納するものなり。

籾摺機械其の他調製の裝置は甚だ複雜にして幾多の傳動裝置によつて自由自在に目的の作業を遂行して違算なきを期し居れり。特に籾摺機は新規發明の機械にして特種の考案になれるを以て絶對に胴摺なきは勿論碎米を生ずることなく、而も米の光澤は實に立流なるものにして之れが爲めに收量も意外に多きを得るに至れり。

以上の作業に要する動力は總て石炭を使用せず全部籾殼の燒燒作用に依るものにして、其順序は籾摺作業中の籾殼を送風機によつて『ボイラー』の中に送りて石炭の代用と爲し、此の籾殼の燃燒したるものは總て燻炭の肥料として廢物迄も有益に利用しつゝあり。

(4)收益の分配（土地一町歩を所有し之れを自作するものゝ收得を標準としたるもの）

右收益の分配方法は生産物收量の内より種子、肥料、不足勞力、及脫穀收納調製に要したる直接作業用の機械使用費（脫穀收納調製費に對し反當一斗をを限度とす）以上を合計して天引（地主作人收益分配歩合と同一割合による負擔）したる殘餘の純收益を作人に二分五厘地主は七分五厘の割合によりて分配するものなり。

此の歩合は元と作人に於て一町歩の土地を所有し、之を自作せる農家の收益より少からぬ收益を得せしむべきを目的として定めたるものなり。

各府縣の農家收入を廣く調査の結果一町歩の土地を所有して之れを自作せる農家は

一ケ村中に誠に少數にして、僅かに六七名に過ぎず。特に富有なる村落に於ても三分の一に足らざるの實狀なり。一町歩の自作農と言へば確かに中流以上の農民なることは明らかなる事實なれば、之れを標準として定めたるものなり。

而して作人の純利益は一町歩に對し二分五厘なり。去れば擔當耕作の標準が四町歩なるを以て二分五厘の四倍は卽ち一町歩を自作せるものゝ純利益と同一なる結果を生ずるものなり。而して之れを實施したる後更に研究を重ね多大なる改善を加へたる結果、現今にては優に五町歩を擔當耕作して其の收益も亦確實に前記の自作農以上に純益を得つゝあり。其實例を示せば左の如し。

直營分益農作人實收表（既往三ケ年平均）

農區別	一戸當純益	備考
高崎	二八、四〇七石	屑米及藁ヲ含ム
都	二四、二六七	同
錦	二三、五六七	同

沿岸古地の一町歩自作農實收表

區分	一戸當收益	同上ヲ得ルニ必要ノ經費	差引純利益	備考
最高	三〇、二七〇石	一一、五八二石	一八、四一八石	必要經費ニハ種子、肥料、挿秧賃（全體ノ三分ノ二雇入）諸稅公課ニテ一町歩ニ付四三八圓五三〇ナレバ之レヲ一石當米價三十七圓トシテ割當テタルモノ
最低	三、五九〇	一、八五二	九、七三八	收益ハ屑米及藁ヲ含ム

以上の外左記の規定を設け將來は土地所有權を有する眞の一町歩以上の自作農たらしめんとするものなり。

直營農備荒基金及安定基金支給規程（拔抄）

作人安定の爲め左記各項の金額を備荒基金及安定基金として支給するものとす。

一、備荒基金

イ、反當收穫二石二斗以上のもの對し奬勵米を支給することゝし、收穫二石二斗に對し奬勵米二升とし、收穫一斗を增す毎に奬勵米五合を增加支給すること、

ロ、脫穀收納費負擔反當二升五合に相當する玄米を支給すること、

右イ、ロの玄米を時價に換算して之れを地主に於て積立年六朱の利率によりて十ケ年間利殖し之を各作人に支給するものとす。

但し其間に於て凶作ありたる場合は必要に應じて之を支出することあるべし。

二、安定基金

一戸擔當面積五町歩に對し水田一反歩に相當する表裏兩作の收益を地主に於て積立、年六朱の利率に依り三十ケ年間利殖し之を各作人に支給するものとす。(本金額を以て一戸に付一町歩以上一町五反歩の自作農たらしめんとするにあり)

但作人にして前項積立金を以で開墾地内の土地分讓を希望するものありたるときは、直營農手及請負耕作人並に小作人の爲めに分讓用として區劃せられたる二百町歩の範圍内に於て適當の場所を撰定して之を分讓することあるべし。

三、已むを得ざる事故の爲め、又は誓約の條項に違背せる行爲ありたる爲め、中途退農する者に對しては前項に依らず特に左の通り給與するものとす。

已むを得ざる事故の爲め中途退農するものに對しては、其退農に至る迄積立たる備荒基金及安定基金の全部を支給し、誓約書の條項に違背せる行爲ありたる爲め退農するものには其退農に至る迄積立たる備荒基金のみを支給するものとす。

右規定を應用せば其結果左の如し。

安定基金計算表

種別	一ケ年積立量	單價	金額(一ケ年積立)	三十ケ年	摘要
表作玄米	二、四五三石	三五、〇〇〇円	八五、八五円	—	高崎、都、錦、大正十年度平均收量二石八斗四升九合ノ内ヨリ費用三斗九升六合ヲ控除セル殘額
裏作小麥	〇、八五〇	一五、〇〇〇	一三、七五〇	—	反當收量一石三斗ノ内ヨリ費用四斗五升ヲ控除セル殘額
計	—	—	九八、六〇五	八、三六、二六五	

本表により三十年後に於ては一町歩乃至一町五反歩の眞の自作農たる事は敢て難事にあらざるべし。

備荒基金計算表

反當積立米	一戸當積立米	單價	一ケ年積立金	十ケ年後	摘要
〇、〇七五石	三、七五〇石	三五、〇〇〇円	一三一、二五〇円	一、八三三、七七三円	增收奬勵米反當五升機械器具費負擔反當二升五合

以上陳るが如く本農場の作人に於ては毎年斯かる多額の實收（二十三石乃至二十八石）を受くるものにして此の外毎三十ケ年後に於ては八千二百餘圓以上の決定基金を得るのみならず、毎十ケ年後には備荒基金として凶作に遭遇せざる限りは千八百餘圓を收得するものなり。之れと同時に地主に於ては其分配歩合により得たる收益金中より前記安定備荒の兩基金を支出するも尙相當收益を擧げつゝあり。要するに地主と作人とが協力して最善の努力を盡して好結果を擧げざる可からざるの組織になれるを以て、今後益研究努力して更により以上の增收を得て地主作人相互の福利を增進せん事を期しつゝあり。

自營耕作請負農（機械力を利用して集約的精農を目的とす）

從來の小作農は多大なる勞力を要し其の上に耕種栽培は勿論脫穀調製に至る迄改良する處なく、從來取り來りたる方法を千遍一律に繰り返しつゝあるの狀態に過ぎずして、現今に於ける社會の大勢に順應せざるを以て、之を時勢に適合すべく又土地を有利に應用すべく集約的精農を主眼として、專ら人力を省略して機械力により耕種栽培の方法を漸次改良しつゝ生產能率を高め勞費を節約し收益の增加を計らん爲め會社自營的に耕作せしめんとするものなり。

(1)自營設備（直營分益農同一に地主の負擔とす）

地主は、乾燥、籾摺、調製收納の機械は勿論之に必要なる作業場を設け用排水を機械力其他特種の設備方法に依り全部供給排水し、作人は勞力を提供して擔當耕作の作用を爲し、其の生產收益を作人は三分五厘地主は六分五厘の割合により分配するものとす。

(2)用排水設備と排給の方法（全部地主の負擔とし直營分益農と同一なり）

右に對する說明は直營分益農と同一なるを以て之を省略す。

(3)作人の擔當面積は二町乃至二町五反歩とす。（面積を直營分益農より少しくして更に一段の集約法を執り生產能率を高めんとしたるもの）

一戸一人七分乃至二人を以て前記の擔當耕作を爲さしむるものにして、普通の小作方法によりては何としても出來得べきものに非ざれども、本農法に於ては(1)(2)に說述せし如く機械力を應用して人力を省き、以上の面積を容易に且つ安全に耕作し得るに至ら

しめたるものにして、其の耕種栽培にも亦研究を重ね漸次有益なる方法を取らしめんとしたるものなり。

(4)收益分配の方法

一、表作は種子、肥料代を生産收益の内より天引と爲し、(地主作人の歩合により負擔)殘收益を作人には籾量にて三分五厘を地主が設備せる脱穀機を以て脱穀すると同時に籾にて分配し、殘餘の籾は地主が設備せる作業場に送り機械力により乾燥、籾摺、調製收納を完了せしむるものにして此間多大の勞力を省略し得たるものなり。

二、裏作は全部作人の所得とす。

以上の方法に依るものなるを以て普通の小作農とは其趣を異にし、勞資協調の意味に於て作人地主共に奮勵努力して勞費を節約し、生産能率を高めて其の收益を相互に分配せんとしたるものなり。

右の外左記の規定を設けて三十ケ年後は相當の自作農たらしめんとしたるものなり。

請負耕作農奬勵金及備荒安定基金支給規程（抜抄）

作人安定の爲め左記各項の金額を耕作奬勵及備荒基金並に安定基金として支給するものとす。

一、耕作奬勵

イ、反當收穫二石二斗以上の者に對し奬勵米を支給することゝし、收穫二石二斗に對し奬勵米二升とし收穫一斗を增す毎に奬勵米五合を增加支給すること。

但其内二分の一に相當する金額は備荒基金として積立利殖するものとす。

ロ、肥料費負擔額の内六分五厘を支給すること。

ハ、裏作は全部無料とすること。

二、備荒基金

イ、脱穀及收納費負擔反當二升五合に相當する玄米を時價に換算して支給すること。

ロ、耕作奬勵に依り支給せらるゝ奬勵米の内二分の一に相當する金額、

右イ、ロの金額を地主に於て積立年六朱の利率によりて十ケ年間利殖し、之を各作人に支給するものとす。

但其間に於て凶作ありたる場合は必要に應じて之を支出することあるべし。

三、安定基金

一戸擔當面積二町五反歩に對し、水田五畝歩に相當する表裏兩作の收益を地主に於て積立年六朱の利率に依り三十ケ年間利殖し、之を各作人に支給するものとす。(本金額を以て一戸に付五反歩以上八反歩の自作農たらしめんとするにあり)

但し作人にして前項積立金を以て開墾地内の土地分讓を希望する者ありたるときは、直營農手及請負耕作人並に小作人の爲めに分讓用として區劃せられたる二百町歩の範圍内に於て適當の場所を撰定して之を分讓することあるべし。

四、已むを得ざる事故の爲め、又は誓約の條項に違背せる行爲ありたる爲め、中途退農する者に對しては前項に依らず、特に左の通給與するものとす。

已むを得ざる事故の爲め中途退農する者に對しては、其の退農に至る迄積立たる備荒基金及安定基金の全部を支給し、誓約書の條項に違背せる行爲ありたる爲め退農する者には、其退農に至る迄積立たる備荒基金のみを支給するものとす。

以上の如く機械力を應用して努めて人力を省き、其の餘裕あるものに對しては副業を奬勵し相當なる收益を得せしむべき方法になり居ることなれば、眞面目に勞働し又普通農家としての生活分度を超へざるものは、將來に於て豫定以上立派なる自作農となるを得べき實收を得つゝあるものなり。

小　作　農（生産能率を高めんが爲め反當玄米五升に相當する金肥を地主に於て提供するものなり。）

一戸一町歩乃至一町五反歩を擔當耕作せしむるものにして、表作には水稻裏作には小麥、裸麥、蠶豆、蘭草等を栽培し、副業としては花莚、疊表、繩、叺、又は養鷄なりとす。

小作料は檢見法により徴收す。

イ、玄米生産收量の四分乃至六分を徴收することゝし、奬勵として一反歩二石二斗を超過するものに對しては、其の超過額に付ては七分を作人に與へ三分丈けを徴收し、三石を超過するものに對しては其の超過額は全部作人の收得とす。

ロ、裏作は全部作人の收益とするものとす。

以上の方法に依て實施の後更に亦左記の規程を設けて收穫の増加を圖りつゝあり。

小作人に耕作奬勵及安定基金支給規程（拔抄）

小作人に耕作奬勵の爲め、肥料を安定の爲め、金員を左記各條に依り支給するものとす。

耕　作　奬　勵

一、賃借契約作人にして其耕地に對し會社の承認を受け稻作（苗代を包含す）に適當の施肥をなすものには、會社は其耕地の施肥反別（苗代を包含せず）に應じ、毎年肥料を補助支給するものとす。

二、前條補助の肥料は壹反歩に付玄米五升の價格を標準とし、會社に於て價格施肥の種類數量を決定し、金肥を買入れ支給するものとす。

三、金肥支給の時期は會社より賃借人に通知するものとす。

四、會社の承認を爲したる施肥の種類、數量を變更し、若くは施肥をなさざるときは會社の承認を受くべきものとす。

五、前條の場合施肥適當ならず。又施肥を中止し若くは施肥をなさざるとき。其他賃借契約に違背したる行爲ありたるときは、既に支拂ひたる當該年度の肥料は返還せしむるか、若くは翌年度分の給與を停止することあるものとす。

安定基金

六、會社は賃借地一反歩に對し毎年玄米貳升を積立て、年六朱の利率に依り三十ヶ年間利殖し、之を各賃借契約人に支給するものとす。

但し賃借人にして前項積立金を以て開墾地内の土地分讓を希望する者ありたるときは、直營農手及請負耕作人幷に小作人の爲めに分讓用として區劃せられたる二百町歩の範圍内に於て適當の場所を撰定して分讓することあるべし。

七、已むを得ざる事故の爲め退農するもの、若くは農業經營方法を變更したる場合、又は賃借契約に違背せるものに對しては前項に依らず、特に左の通り給與するものとす。已むを得ざる事故の爲め退農するものに對しては、其退農に至る迄、又農業經營方法を變更したる場合は其時期迄積立てたる安定基金の全部を支給し、賃借契約の條項に違背せる行爲ありたる者には之を支給せざることあるものとす。

八、農業の經營方法を變更給たるときは本規程は自然消滅するものとす。

イ、一反しに對し米五升に相當する金肥を與へて收穫を增加歩しめんとす。

從來の小作農としては地主が作人に肥料を供給するが如きことは一切なかりしものなるが、收穫の檢見に當り稻の草出來の旺盛なるに反して其の實收は意外の少量なるの實蹟を示せり。之れ全く自給肥料を主としたるものにして其の必要なる成分の缺乏に基因せるに外ならざるものと認めらる。茲に於て其の缺乏せる成分の金肥を補充し多

大なる增收を得せしめんとしたるものなり。

故に此の方法實施後に於ては二石二斗以上の增收奬勵の意味も實現すべきものと信じて疑はざるものなり。

ロ、此の外安定基金として一反歩に付玄米二升を時價に換算し、之れを地主に於て積立年六朱の利率に依り三十ケ年間利殖し、作人に交付することゝなり居れり。

右の如き小作制度なるを以て單に歩合のみを以て普通一般の小作歩合と同一に律することは不可能なるのみならず。實際の收入に於ても亦合理的にして多大なる收益を得べき組織となり居れるものなり。

以上經營法を實施するに當りては、試驗場を置き常に改善方法を研究し、其他農場事務所長の下には前記農業專門技師の外、土木、機械等の專門技師ありて工事計畫、水利（灌漑、排水、貯水）其他の事業に從ひ、各農區に私設電話を架設し經營上の指導監督等遺憾なく行き渡りあり。大正十一年十月には畏くも梨本宮殿下親しく御視察あらせられ、其經營法を感賞あらせられたりと聞く。篤農家は一度視察するの利益あるべし。

著者は大正十一年三月實地を視察し感嘆の餘二十字を獲たり曰く　墾開何萬畝、新出大農村、家給人和樂、穰々禾黍繁。

文は六段に分れ、

第一段は序說で、農場に足を入れた最初の所感、

第二段は藤田村の位置とその附近、

第三段は海岸の築堤とその內側の堀江、

第四段は干拓事業、

第五段は干拓事業の一般、

第六段は結尾で、農場附近の景觀、

文の中心は第四段五段の干拓事業を說くあたりにあります。

『藤田村（岡山縣兒島郡）に入れば、一望十里、萬頃の稻田漸く黃ばまんとす。云々』

この段は序說で、農場に足を入れた最初の所感です。『一望十里』にその規模の宏大を思はせ、次いで『萬頃の稻田漸く黃ばまんとす。』といひ、『秋なれば今は見るに由なし。』といひ、『說穀船のよしずにおほはれながらつながれたるを見る。』といひ、晩秋、收穫期の情調を遺憾なく表

現し盡してをります。

兒島農場は所謂大農式の工業的農業で、在來の我が小農業とは全然その趣を異にしてをります。一切人力を省き、耕すにトラクターを用ひ、取入れに脫穀船、乾燥作業に乾燥機を使用し、すべて機械力によつて能率の向上を圖つてをります。

トラクターはタンクに類する構造で、自動的軌道を備へ、耕作機を曳引しては原野を耕し、開拓機を曳引しては拔木開墾、その他目覺ましい活動を見せます。

脫穀船は用水路に浮べたBW式水上移動脫穀機を意味し、その兩岸に推積せる稻束を扱ぎ落し、次から次へと農場を移動して、作業の進渉を速かならしめる最新の機械です。

百四十二頁の挿畫が卽ちそれで、上のは耕作機を曳引して耕作に從事するトラクター、下のは刈り取つた稻束を脫穀船へ運ぶ光景です。

『一望十里』　一目に十里も見えるといふ意で、見渡しの廣々としたありさま、

『萬頃』　地面又は水面の廣きさまにいふ語、

『トラクター』　牽引車と譯する。

『溝渠』　給水又は排水用として、水を流れしめるため、地を堀りたるものゝ總稱、暗渠と開渠とに分つ。『みぞ』に同じ。

『藤田村はもと兒島灣の干潟なりしを、近き頃拓かれて農場となりしもの、云々』

この段は藤田村とその附近の有樣で、現在盛觀を呈してゐる藤田村も干拓前は海底の一部であつたことを叙してをります。兒島農場の基礎は一にこの干拓事業にあつて、今日の盛觀を見るに至つたのは、全くこの干拓事業の賜なのであります。

現在の兒島農場の地はもと兒島灣の干潟で、泥砂遠く海上に連なり、潮滿ち來れば隱れ、潮引けば現はれ、泥濘脚を沒して全然使用し得ない廢地と見做されてゐたのであります。この廢地に着眼したのは大阪の豪商藤田氏で、藤田氏は自己の率ゐる藤田組の一大公共事業として、夙にこの地の干拓に志し、巨萬の資力と多大の勞力を拂つて、この事業のために全力を捧げ盡したのであります。當時この一大計畫が世に傳はるや、人は皆その成功の如何を疑つたのでありましたが、その後着々としてその計畫が實行され、泥濘の廢地は日一日と肥田沃野と化し、遂に今日の盛觀を見るに及んで、兒島農場の名と藤田組の偉功とは、明治產業史の一頁をなすに至つたのであり

ます。

最近各地に勃興した干拓熱も、全くこの藤田組の事業に涌をなしたもので、茨城縣に於ける霞が浦の干拓、石川縣に於ける河北潟の干拓など、その最も著しいものであります。

『干潟』　潮の干たる潟、潮の干たあとの砂地、
『農場』　農業の經營をなすべき一の組織を有する農地、農舍、農具等の總稱、
『往時』　往にし時、むかし、以前、
『築堤』　つゝみを築くこと、また其の築きたるつゝみ、
『面影』　かほつき、おもざし、髣髴と目さきに見ゆる姿、

『藤田村が海と接する處、十數キロメートルにわたりて築堤あり。其の內側に沿うて穿てる堀江には、よし四周に叢生す。云々』

この段は海岸の築堤と、その內側の堀に就いての叙述で、干拓工事の最も重要な部分なのであります。

干拓工事を行ふには、先づ第一に干拓地の外側に堅固な堤防を築き、海水の浸入を防がなければなりません。さうして愈々干拓に着手するのでありますが、この築堤は干拓工事の終了後においても、農場を防護する重要な任務を有してをりますから、出來るだけ堅固で、且つ永久的なものでなければなりません。萬一この築堤が不完全であつたら、海潮の浸入を防ぐことが出來ないばかりか、一朝風波の場合などに、忽ち崩壞して折角の農場も流失の難に遭遇することが無いとも云へません。この意味からして兒島農場の築堤は非常な堅固なもので、海に接する外側十數キロメートルの間、石とコンクリートで固めた築堤は蜿蜒長蛇の如く、恰も一大城廓の海に枕したが如き偉觀を呈してをるのであります。

築堤の內側には漫々と水を湛えた堀が穿たれてをります。これはおもに潮水の潛入を防ぐための用意で、これも農場の保護上無くてならない設備の一つであります。

その他用水の供給、惡水排除の施設も亦農場の經營上特筆すべきものゝ一つでありませう。

兒島農場の用水路と排水路とは六十間の間隔を置いて交互に排列し、更にこれを橫斷して中央に用水の本線を設け、其の兩端には排水の幹線を置き、用排水共に縱橫の接續點には、開閉自在の分水樋を設けて水の排除を自由ならしめ、用水は常に田面よく高く、排水はこれに反して常に

田面より低き水位をなし、水の新陳代謝を容易ならしめてをります。

『叢生』　草木などむらがりおふること、

『潜入』　しのびいること、くゞりいること、

『堀江』　堀りわりの川、人工を以て開鑿したる入江、

『翼を休む』　飛んでゐた鳥がしばらくそこでやすむこと、

『築堤に立ちて沖の方を眺むれば、遙かに霞み渡され兒島半島の山々、日を背にして藤紫の色に輝く。云々』

この段と次の段とは、第二期に屬する干拓事業の大體で、兒島農場が現在盛んに經營しつゝある工事の概要であります。

第四段では先づその遠望、第五段は干拓の方法とその將來、前者は筆者がその地を踏んで目のあたりに眺めた實感、後者はその見聞なのであります。

干拓は河川、湖沼、又は海岸を干潟として、これを美田沃野に化する作業をいひ、普通干拓地の一部に防水堤を築き、電氣ポンプを以て一方からは排水し、一方からは土砂を水と共に送入して、漸次に土砂を堆積して水面を陸地化する作業を意味してをります。しかし兒島農場に於ける干拓はこれと趣を異にし、全然自然の力を利用し、泥土の堆積を促進することによつて干拓の目的を達しようといふのであります。

この大規模の計畫も今やその大半を終了し、完成の日もあまり遠くはありますまい。しかも第一期における一千七百町歩の農場でさへ、その宏大に驚いた世人は、近き將來において更に五千町歩の大農場の出現を見れば、果して如何なる感を以て迎へらるでありませう。

『廣漠』　はてもなくひろ〳〵としてをること、『渺漠』に同じ。

『沈澱』　化學上の語で、二種又は二種以上の溶液を互に混合するとき、其の溶質が互に成分を交換して不溶性の物質を成生するときは、擬乳狀の物質となりて析出す。沈澱はこの析出物の稱。

『堆積』　うづ高くつむこと、つみかさなること、『累積』に同じ。

『田圃』　田のある土地、田のあるあたり、『田畑』に同じ。

『促進』　うながしすゝむること、

『隨所』　到る所、どこにでも、

・『樋門』　樋の出入口に設けた門、又は堰き止めた水の出口に設けたる戸、開閉して水を出入せしむるもの、樋は水を導き送る長き管、したひ・懸け樋・埋み樋等がある。

『干拓』　河海湖沼などを干潟にして田地に化すること、

『眼を擧ぐれば、兒島灣の咽喉、高島のあるあたり、半島の山々の影淡くうつる處、云々』

この段は結尾で、農場附近の景觀です。

この文全體が既にさうであるが、特に最後の一段は措辭の妙を極め、宛然一幅の畫幅をひろげたるが如く、再讀三讀いよ〳〵その興を深くするの感があります。

結語の『泥土は今や次第に低し。』は前段及び前々段と照應して、文に千鈞の重み添へてをります。

補充文には菊池幽芳氏の『日本海周遊記』の中から、次の『詩的農園』をあげておきませう。

詩的農園

札幌に至りて最も詩趣に富む地を求むれば、同地の農園なるべきか。

札幌農園は世界の大農園たる、亞米利加マサチユーセツツ農學校の規模に依りて成れりと稱せらるる、札幌農學校に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備、遺憾なきに近きのみならず、地は卽ち石狩平野の一部なるが故に、到底內地においては求べくもあらぬ廣漠の地域を領し、凡百の施設、その狹隘を感ずるなく、縱橫に經營の技能を發揮して餘りあり。農園として斯の如く完全なるは蓋し尠なからん、

然れども余はここに農園の設備を說かんとするにあらず。余の記さんとする所は、唯その風致にあり。然り、農園の粹たる、廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は札幌の障屛をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、その涯際を知らず、萋萋たる牧草氈の如き處、ここには、かの林中の雜樹の如く、他と相凌ぎ相排せず、廣きスペースを占めて、處まばらに立てる楡樹の、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は遺憾なく星の雫を受け、何に遮らるるものもなきその根は、

太古のままなる土壤より、潤澤なる養分を吸ひ、思ふままにその特性を發達せしめて、鬱蒼たるその枝葉は百歩の地を蔽ひ、森森たるその幹は、百尺の空を磨するを見る。一たび足を農園の牧場に容れたるものは、何人と雖も遺憾なく發揮せられたる楡の美に驚嘆すべし。

それ廣漠たる平野の青きは既に人の心を快濶ならしむ。別に處處に喬木の亭亭たるを配するの時、その趣味卽ち油然として加はる。而もその喬木の種類によつて、また大いに詩趣を增減す。かかる平野を飾るに最も適せる樹木は、松の如きにあらず。杉の如きにあらず。實にその高さと共に厚さを有し厚さと共にまたその幅を有するもの、分明に云へば、その枝葉十重二十重に密生し、こんもりとして、晝猶暗き木蔭を作るの喬木たらざるべからず。請、かくの如き喬木の森森として青綠の平野に立てる事を想像せよ。何ぞその繪の如くにして、また詩の如くなるや。人若し十分にかかる想像を繞らす事を得たりとせば、其の人は卽ち遺憾なく、札幌農園を其の腦に描き得たるなり。

農園が楡によつてその詩趣を加ふる事斯の如し。然れども、これたゞ自然における詩趣のみ。更に此の間に牛を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞詩趣は始めて活躍す。

丈高く四肢長く、體軀駑くべきほど巨大にして、黑白の斑を有せる一種の牛が、一はその大樹の下に横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短き一種の牛などが此處彼處に草をあさる、或はさまよへる。或は尾を振れる、更に美しき毛を被れる一種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光に、人馴れて近づき來たるなど、悠悠自適の樣見えて、若し此の世に樂園なるものありとせば、その關門は實に此の如き處なるべしと思はしむ。

その繪畫的なる、その詩的なる、又附近の建物と相待てその外國的なる、少なくもここに來るものは、塵世の光景と甚だしく相隔たれるを感ずるならん。札幌農園は更に斯の如き特色を有す。余は斯の如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、併せて札幌農學校より佳往文章の士を出だせるの偶然ならざるを知り、且つ之れを喜ぶものなり。

第二十九課　晩　鐘

井上監修官の洋行土産の一つで、名畫晩鐘を中心として、畫聖ミレーを紹介しようといふのであります。

一寸目新らしい構想で、前半はアンゼラスの鐘、即ち晩鐘の印象記、後半はミレーの略傳と名畫晩鐘がその當時の人に顧みられなかつたこと、すべてが名畫晩鐘によつて統一されてゐるところを見逃してはなりますまい。

百四十七頁の挿畫は『アンゼラスの鐘』、即ち名畫『晩鐘』の模寫、百四十九頁の挿畫はミレーの自畫像です。

『秋の日は既にたそがれ初めぬ。落陽は遙かなる地平線の彼方に沈まんとして、金色の餘光はなやかに匂ひたれど、彼方の空に立迷ふ薄黑き雲は、將に暮色の至らんとするを示すに似たり。云々』

これは筆者が歐米漫遊の際、佛國のルーブル博物館に於けるミレーの名畫晩鐘に對する印象記

の一部です。

ミレーは農夫の畫家でありました。彼はある時期において他の畫家と同じく神話畫や裸體畫などを描いたのでありますが、その他は常に農村の生活だけを描き、農村の生活は實に彼の作品の大部分を掩ふ主體なのでありました。さうして農村の生活を描いたところに、繪畫史上における彼の獨特な地位もあり、人間としての彼の偉大さも存在するといつても過言ではありますまい。

無論農村の生活、農夫を描いた畫家は決してミレーのみではなく、又ミレーに始まつた事でもありません。既に十七世紀のオランダの畫家の中にも、農村を描いたものは一二にして止まりません。しかし彼等の描いた農夫はムーテルの云ふところによりますと、全く次の二つの種類に屬するに過ぎない。即ち一つは例へばテニールスが描いたやうな、都會らしい、知識的な容貌態度を持つ農夫――若しも彼等が百姓服を着て居らず、農具を持つてゐなかつたら、多分教養ある市民と間違へられるであらう――であり、もう一つは、例へばブルーウェルやオスターデが描いたやうな、勞働してゐる農夫ではなしに、酒に醉つた農夫、大食してゐる農夫、――彼等は人々に笑はれるために描かれてゐるやうに見える――であります。これ等は何れも本當の農夫ではありません。テニールスの描いたやうな農夫は、恐らく現實には存在しない農夫であり、隨つて少しも

理解されてない、研究されてない農夫であります。またブルーウェルやスターデの描いたやうな農夫は、疑ひもなく事實存在してゐる農夫ではあるが、決して本質的な農夫ではありません。それは單に皮相的に把捉された農夫であつて、その生活を充分には理解されてない農夫であります。

更に十八世紀になつてからも、例へばグルーズのやうな農村の生活を描いた畫家はありましたが、しかしグルーズの描いたのも農村の生活を眞に理解したものとは云へません。如何となれば彼が描いた農村はあまりに美しく、あまりに天國的であつたからであります。それは人生の慘苦から遠く離れた、平和と幸福に充ちたユートピアとして描かれてをります。隨つてそこに住む農夫も、純情にして高潔、些の汚れをも知らない人々として描かれなければならなかつたのであります。斯樣な農村、斯樣な農夫が單に空想に過ぎないことは、こゝに改めて云ふまでもありますまい。農村の生活、農夫の生活は、古くギリシアの詩人ヘシオドスが既に『勞作』の中に歌つたやうに、また近くは農村問題の頻發がそれを暴露してをるやうに、勞働と慘苦に充ちた生活なのであります。農夫は額に汗してパンを得なければなりません。朝から晩まで働き通さなければなりません。さうしなければ彼等は生きて行かれないのであります。それが彼等の運命なのであります。實に働くことは、――都會に於いてもさうであるが――農夫の生活の大部分であり農夫の生活そのものなのであります。

働くところの農夫、これこそはミレーが發見した主題であります。さうしてミレー以前にはそれを描いた畫家はないのでありますから、ミレーを農夫の發見者、眞の農夫の畫家と呼んでも決して間違ではないのであります。

彼の描いた農夫達がどんなに精一杯に働いてゐるかといふことは、こゝに說明するまでもなく、彼の作品を見る誰もが直ぐに感じ得ることであります。鳥の群に跡をつけられながら種子を蒔き散してゐる『種子を蒔く人』、鋤にもたれて、ほつと息をついてゐる『鋤を持つ人』、自分の體の何倍もある大きな薪を背負つて、その重みのために體を二つに折り曲げてゐる『樵婦』、その他『土を掘る人』、乾草を集める人』、『海藻拾ひ』等、等、等、殆んど枚擧に暇がありますまい。殊に彼が最初の傑作である『篩を振ふ人』の如き、それが惹き起した思ひ掛けない賞讃と非難とは、あらゆる種類の革命に興味を持つた人々の間に、異常なセンセーションを惹き起したのであるが、それは特に、農夫の苦しい勞働を描いたところに、階級闘爭的な意味があると考へられた爲であります。

この作品はこれがため、五百フランの賞金を附與せられて革命政府に買上げられ、引續いて彼

に少からぬ利益と便宜を與へられたのでありました。

これは單に『鍬を振ふ人』ばかりではありません。その後のミレーの作品に對しても、革命的な意味を附與した人は決して少くはありませんでした。例へば『種を蒔く人』の如き、人々を威嚇するために、散彈を空高く投げ散らしてをるものと解釋され、サン・ヴィクトルは、『落穗拾ひ』を敗殘者の三つの運命と呼びました。詩人ボードレイルは、ミレイの農夫の中には、革命的演說があると云ひました。政治と社會的關心とは藝術にとつて有害であると考へてゐたコローは、ミレーの作品を宣傳的であるといふ理由の下に非難しました。しかしこれ等の賞讃と非難とは當つてゐません。何故といふに、ミレーに描かれた多くの農夫達は、人々が考へたやうな宣傳的な意味を持つたものでもなく、――宣傳的な意味を持たせるのは、人々の自由に屬することではあるが――またミレー自身もそのやうな事には全然興味を有しなかつたからであります。彼は政治には無關心で、革命に對して寧ろ疑惑の念を持つてゐたといつてもよろしい。彼はコローやルーソーと共に『藝術は愛であつて、憎みではない。』といひ、また『畫家が貧者の苦惱を描いたとしても、それは富める階級に對する羨望と怒りを刺戟する目的のために描かるべきものではない。』ともいつてをります。

ともあれ彼は農夫の發見者であり、農夫の畫家であります。これだけでも繪畫史上に於ける彼の位置は、前人未踏の光輝あるものであるが、彼をして更に偉大ならしめたものは、彼が單に農夫――眞の農夫の生活を描いたばかりでなく、農夫の中に人間を描いてゐるといふことである。人間に普遍的な、さうして絕對的な價値を描いたといふことである。ミレーの尊敬すべきは實にこの點で、ミレーをして更に偉大ならしめたものも亦この點にあります。

ミレーに描かれた農夫達は、いづれも運命に堪えながら働いてをる。この事は直ちに彼等が單に農夫としてゞなしに、人間として描かれてをることの有力な暗示であります。彼等の生活の中には、彼等が苦痛の中にも生きんがためのある喜びを感じてをることを看取することが出來る。さうしてその喜びが彼等の苦痛を緩和し、更に明日の努力に對する勇氣を鼓舞するかのやうに見受けられる。これはこの教材の主題となつてゐる『晩鐘』を見ても知られませう。この意味において『晩鐘』は彼が畫家としての偉大さを物語り、彼が作風の貴さを物語る代表作の一つとも云へませう。

『晩鐘』入相の鐘、くれのかね。

『落陽』　入日ゆふひ、落日、『夕陽』に同じ。
『餘光』　あまりのひかり、日が落ちてあとに殘つたひかり、
『暮色』　くれかたの薄ぐらき色、くれかたの景色、
『赭衣』　あかい色の着物、こゝでは赤い色の洋服、
『つつましく』　愼むべくありの意で、敬虔な態度をいふ。つゝしみ深く、又は遠慮がちに、
『瞑目』　安らかに死すること、こゝでは目をふさぐこと、
『祈念』　祈りて心に念ずること、『祈願』に同じ。
『複製品』　複製はそれと同じものを二つ以上製作すること、複製品はその品、

『北フランス、ノルマンヂー半島の一角なる僻地の農家に生れしミレーは、少時より父母の耕作を助けて田園に勞せしが、云々』

中段はミレーの生立の一般です。

ジュアン・フランソア・ミレーは、農村に生れて農村に育ちました。彼は實にその生活の第一歩において既に農夫だつたのであります。彼が生地はコータンタンの北部にあるグレヴィル敎區内にあるグリュシーと呼ばれる一小村でありました。其處はノルマンヂー半島の海に面した傾斜地で、一年の大部分は大西洋から吹いて來る海風のために荒されてをりました。海岸には所々に岩石が突き立つてゐて、激浪に揉まれてゐる船を打ち碎くのでありました。彼の家はこの海に面して屹立した岡の上にあつて、僅かに風から防禦されてゐましたが、其處から見通される村の樹木は成長を妨げられて、いぢけて節くれだつてをり、風景はすべて粗末でさうして陰鬱でありました。このやうな村の人々が、朝から晩まで額に汗して野の仕事に働かなければならないのはいふまでもありません。それは一年中休むことのない勞働者であります。ミレーはそんな村に生れました。この村の自然と生活とが、既にミレーの藝術の特質を決定してをるかのやうに思はれます。

彼が生れたのはナポレオンが聯合軍に敗られてエルバに流された一千八百十四年の十月四日でありました。我が國では光格天皇の文化十一年で、近藤重藏が北地を探險して歸つた年です。父はノルマン人の子孫で、ジュアン・ルイといふ信心深い實直な農夫でありました。彼は若干の土地を所有してをりましたが、決して有福な方ではありませんでした。彼には幾らか藝術的な素質があつたらしく、木を彫刻したり粘土で物の形を作つたりすることが出來たと云はれてをります。又、彼は村の合唱隊の指揮者でもありました。母は溫順なアデライドであります。彼等の間には

既に一人の女の子が生れてをりました。ミレーは彼等の第二子でありました。その後彼等の間には、なほ次ぎ〳〵に子供が生れて、すべて八人の子福者となりました。

ミレーと同じ家根の下に住んでゐたのは、單にこれだけの家族ではありませんでした。その外に祖母のジュムランと大伯父のシャルルがゐました。シャルルは僧侶でありましたが、ナポレオン戰爭の紛亂を避けて、この家に身を寄せてゐたのであります。

僧侶のシャルルは――ミレーが七歳の時に死んだが――小さなミレーに祈禱の日課を授けるのを自分の一つの任務としてをりました。ミレーの性格を作り上げるには彼もやはり無くてならない一人でありました。しかし彼にもまして、もつとミレーに深い影響を與へたのは、祖母のジュムランでありました。彼女は非常に敬虔なる清教徒的な性格で、何時も神の榮光を讃美することを怠らないといふ風でありました。若い兩親が野で働いてをる間、家にゐて小さなミレーの守をしたのは實に彼女に外ならなかつたのであります。彼女はその小さな孫達に、なかば童話的な、キリスト教の聖徒達の物語をして聞かせました。特に彼女が崇拜したアッシジの聖フランシスに關する物語を――。ミレーのフランソアといふ名前も、實は聖フランシスに因んで彼女が付けたのでありました。

ミレーはこれ等の人々のために、成長するにつれて次第に考深い少年になりました。

ミレーに畫家としての才能の現はれたのは、彼が何歳の時からであつたか、はつきりした事は知られてをりません。しかし彼がかなり早くから繪を描いたことは、いろ〳〵な點から想像することが出來ます。彼は教會でのラテン語の學習を止めてからは、父と一緒に野に出て、家の仕事を手傳はなければなりませんでしたが、その仕事の相間には樹木や野原の景色を寫生し、又、夜は部屋の一隅に踞まつて、書物から得た感興を繪に描いたりするのでありました。父のジュアン・ルイはそれに氣付いて、その度毎に溜息をついてをりました。それは彼が家の仕事を捨てゝ、畫家になりたいと云ひ出しはしないかと恐れたためでありました。

斯うして何年かゞ經過しました。その間に少年ミレーは次第に描くことの興味から遁れられないやうになり、畫家としての自分の才能をも意識するやうになつたのてありませう。さうしてその意識が最早しつかりした動かし難いものとなつたのは、ある日彼が教會からの歸りに、偶然出遇つた一人の老人、――生活の重みのために腰は二つに曲り、上半身を辛うじて一本の杖に支へながら歩いてゐる老人――の姿を描いた時でありました。この人生の苦痛を象徴したやうなスケッチは、少からず父や祖母の注意を引きましたが、その晩彼は始めて父に向つて、畫家になりた

いといふ自分の希望を打明けたのでありました。

この願が聞き屆けられた時の少年ミレーの喜びはどんなものであつたか、けだし想像するに難くはありますまい。彼はその喜びに刺戟されて、非常な熱心をもつて二枚の繪を仕上げることに成功しました。その一枚は笛を吹く牧人の繪で、他の一枚は――これは現存してゐるミレーの作品の中で、最も早い作で、ミレーは晩年に至るまでこの作品を愛して、バルビゾンの畫室には、何時も懸けてゐたといふことである――一人の老人が乞食に食物を與へてゐる構圖で、その下にはラテン語で路加傳第十一章八節の『その友なるにより起ちて與へざれど、ひたすらに請ふが故に、その需めに從ひ、起ちて與ふべし。』といふ文句が書いてありました。

ミレーがこの二枚の作品を持つて、父に連れられて、町から少し離れたシェルブール市へ行つたのは、それから間もない事でありました。彼等はこゝで古典派の畫家ムーシェルの畫室を訪れたのであります。ムーシェルはミレーの二枚の作品を見ました。さうしてその出來映に感心して、ミレーがまだ正式に繪の稽古をしたことのない少年であるとは、容易に信ずることが出來なかつたといひます。その結果、ミレーはムーシェルの弟子となりました。それは彼が二十歳の時のことでありました。彼は斯うして古典派の訓練を受けるやうになりましたが、僅か數ケ月の後には彼はまた家へ歸つて行かなければなりませんでした。それは彼の父が腦溢血のため危篤だといふ知らせを受けたからでありました。彼はやつと臨終の間にあふことが出來ました。父は彼の手を握つて、『お前と一緒に、いつか羅馬へ行つて見たいと思つてゐたのに……』といふ言葉を殘しただけで、遂にこの世を去つてしまひました。それは一千八百三十五年の十一月のことでありました。

父が逝いてからのミレーは一家の責任者となりました。彼は祖母や氣の弱くなつた母や、まだ小さい弟や妹達のために、自ら鋤を取つて働かなければならなかつたのであります。彼はさうした運命に堪へて懸命に働きました。しかし繪を描くことだけは止めようともせず、仕事の暇には祖母や村の人達の肖像を描きました。それが善良な祖母のジュムランには却つていぢらしくかはいさうなことに思はれたのでせう。彼はたうとうミレーに云はずにゐられなくなりました。

『フランソアよ。お前はやはりシェルブールへお歸り、お前のお父さんはお前を畫家にするとおつしやつたのだ。お前がこゝにゐても、やはり繪のことを忘れられないのは、神樣もお前を畫家にしたいと思つていらつしやるしるしかも知れない。』

この思ひやりある祖母の言葉に從つて、ミレーは再びシェルブール市へ歸つて行きました。さ

うして今度は知人達の勸めによつて、ラングロアの門に這入りました。ラングロアは嘗て古典派の大家グローの弟子であつて、この地方では非常に尊敬されてをる畫家でありました。

彼がラングロアの門にゐたのは、僅か六箇月に過ぎませんでした。しかしこの短い間にラングロアはミレーの才能を見拔いたと見えて、遂に彼はこの貧しいミレーを巴里へ送りたいと決心して、市會に宛てゝ次のやうな願書を提出して、年金の下附を願ひ出たのでありました。

『彼の進歩は連續的で、さうして迅速であります。隨つて私は間もなく彼に敎ふべき何物をも有しなくなるでありませう。彼はこの町よりも更に大きい天地と、すぐれた學校と、立派なモデルとを必要としてをります。願くば市の名譽のために云々』

その結果、ミレーはシェルブールの市會から年金四百フランを受けることゝなりました。四百フランの年金は、云ふまでもなく巴里で一年を過すには少なすぎる金額であります。しかしミレーは巴里へ行かなければなりません。行つてしまひさへすれば、生活は多分何とかなるだらう。若いミレーはそんな漠然とした事を考へながら、『巴里』へといふ希望のもとに、一人で胸を躍らしたのでありました。

ミレーが巴里へ出たのは、一千八百三十七年の一月のことで、その時彼は二十二歳の青年でありました。ミレーの貧窮はこの頃から一層甚だしく、唯一の定まつた收入として彼が宛てにしてゐたシェルブール市からの年金も、ミレーが市の生れでない事が知れてからは支出を拒絶されてしまつたし、家からは勿論一フランの金も送つて貰ふことは出來ない。彼は仕方なしに自分でパンを得なければなりませんでした。彼は尊敬するミケランヂェロの感化を示すところの『慈愛』と『ダビテ』を描きました。また聖書の中から題を取つて『ラバンの天幕に於けるヤコブ』及び『ルツとボアズ』を描きました。しかし美術商人達は云ふまでもなく、そんなものには一瞥も與へようとはしませんでした。彼は友人マロルの勸めに從つて、一般の人々に持てはやされる、さうして彼自身の好まない。ワットーやフーシュを摸倣して、パステルの小品畫を描かなければなりませんでした。それ等は大抵五フランから十フランくらゐで買ひ取られるのが常でありました。

かうして稼いで得た金で生活しながら、ミレーは研究を續けて行きました。一千八百四十年彼は始めてサロンに二點の肖像畫を出品しましたが、その一點は――ドラローシュ風の退屈な、重々しい調子の繪であつたといはれてをるが、――入選しました。これから後のミレーの生活は波瀾重疊を極め、實に名狀すべからざる貧困と苦鬪の慘めなものでありました。

一千八百四十八年、所謂二月革命の突發に會し、フランスが再び共和制となり、あらゆる方面

に自由革新の氣が漲り渡つた際、彼は非サロン派の展覽會に『バビロンに於ける猶太人の捕虜』及び『簸を振ふ人』の二點を出品して、美術界に異常な衝動を與へました。殊に後者の『簸を振ふ人』は農夫の畫家としてのミレーの最初の宣言でありました。

七月に起つた巴里の暴動は、ミレーに農村生活の決心を起させる有力な動機となりました。彼は暴動を防ぐために、ロッシュアール街の守備につかなければなりませんでしたが、その間に彼が抱いた政治に對する嫌惡と殺戮の恐怖とは、遂に彼をして屢々巴里の都を離れしめ、モンマートルの田舍へ行かしめました。其處で彼は今更のやうに、平安な農村の生活を見て、自分はやつぱり田舍に屬すべきであることを痛感せしめたのでありました。

田舍に這入つてからのミレーは次ぎ〳〵にすぐれた作品を出して世人を驚かしました。一千八百四十年のサロンには『種子を蒔く人』及び『乾草をくゝる人』を出しました。この二點、特に『種子を蒔く人』は、いろ〳〵の意味で人々を驚かすものでありました。といふのは、彼を共産主義者のやうに考へてゐる年取つた保守的な批評家達が、この繪には革命的宣傳の意味があるといふ見解の下に、激しく非難したのに對して、若い自由な批評家達は、口を極めて賞讃したからであります。

ミレーはこの外、なほ『裁縫する女達』『森の薪取り』『勞働の出かけ』『肥料を撒く人』などの傑作を、次ぎ〳〵に出して世評の的となりました。しかしこの時代のミレーの生活は相變らず苦しいので、質素な暮しの出來る田舍へといふ考へは、一種の空想に過ぎませんでした。貧窮の程度は巴里にゐた時分と少しも變りはありません。むしろ巴里にゐた時の方が、繪を美術商に持ち込むことが出來ただけに、却つて樂なくらゐでありました。斯うしてミレーは一生を困苦と缺乏の間に、戰ひ通さなければならなかつたのでありました。

彼が最後の病床についたのは、一千八百七十四年の十二月の末でありました。それから幾日かを經過したある日のこと、次のやうな死の前兆が傳へられてをります。即ち狩り立てられた一頭の牡鹿が、獵犬に追はれて彼の庭へ飛びこんで來て、さうして獵犬のために食ひ殺されました。ミレーは病床からそれを見て、自分の死が近づいたことを知りました。何故かなれば、彼はこの痛ましい牡鹿と死の運命を共にするのであることを感じたからであります。

果してその翌日――一千八百七十五年(明治八年)一月二十日――偉大なる農夫の畫家、人間の畫家なるミレーは、妻や子に取卷かれながら、安らかに――慘めな運命と戰ひながら――この世を去つて行つたのでありました。

『一角』　一方のすみ、『一隅』に同じ。

『僻地』　片田舎、邊鄙の地、『僻土』に同じ。

『非凡』　平凡ならざること、なみに勝れたること、

『天稟』　天からうけ來つた性質、うまれつき、生得、『天性』又は『天賦』に同じ。

『驚嘆』　驚きて感心すること、

『慫慂』　そゝのかしすゝめること、そゝのかすこと、揚子に『南楚凡已不レ欲レ喜、而傍人說レ之、不レ欲レ怒而傍人怒レ之、謂二之食閻一、或謂二之慂慫一。』とある。

『畫趣』　畫のおもむき、畫のおもしろみ、繪畫の趣味、

『世俗』　世のならはし、世の中、世間普通の人、世の俗人、

『誹謗』　そしること、惡口すること、史記に『誹謗者族、偶語者棄市、』とある。

『粉飾』　紅・白粉などにて飾る義で、よそほひかざること、『化粧』に同じ。

『眞摯』　極めて眞實なること、まじめなること、

『敬虔』　うやまひつゝしむこと、つゝしみかしこむこと、『恭敬』に同じ。

『營々』　あくせくするさまにいふ語、奔走するすがた、

『如實』　實際に見るが如くの意、まのあたりに見るやうに、

『表現』　表面に現出すること、かきあらはすこと、心に思ふことを言語文章繪畫その他によつて外にあらはすこと、

『體驗』　哲學上の語で、自然科學的、即ち概念的の理解に對して、文化史的或は藝術的の形象を觀照する場合に於ける如き具體的、直觀的の理解。何等の素朴實在論的獨斷を混ぜざる純粹にして且つ主客未剖の混沌たる直接經驗、

『獨自』　ひとり自ら、自分ひとり、自分だけ、

『獨歩』　獨立して事をなすこと、他に並ぶものゝなきこと、特別に傑出してをること、『獨行』に同じ。

『境地』　境遇地位の意、出會ひたる境遇、

『されば、西暦千八百五十九年、パリーのサロンに出品せる名畫『晩鐘』さへ、國人には購はれず、云々』

後段は前段の印象記に照應して、名畫晩鐘がその當時の人に顧みられなかつたことを叙してを

ります。

一千八百五十七年のサロンに、ミレーは有名な『落穂拾ひ』を出品しました。それは腰を曲げながら、地上に落ちた穂を拾つてゐる三人の女達を描いたもので、女達のさま〳〵な姿態を主題として、三人の異つた衣裳に充分の注意を拂ひ、色彩の效果をも顧慮した、彼の傑作の一つであります。然るに多くの批評家達は、當時この作品を理解することが出來ませんでした。これまで彼を賞讃してゐたサン・ヴィクトルも『これ等は畠に置かれた案山子である。ミレーはこのやうな貧乏人を描くにはこんな、拙い手法が適當してをると思つてゐるのであらう。この作品の不快なことゝ粗野のことは、何といつて好いかわからない。』と攻擊しました。たゞエトモン・アブーだけが、この繪の嚴肅な單純さを理解したに近いくらゐのものでした。

更に一千八百五十九年のサロンに出した『アンゼラスの鐘』即ち『晩鐘』は、殆んど顧みられもしませんでした。あれ程の名畫が顧みられなかつたといふのは寧ろ不思議に思はれるのですが、その當時は僅かに千八百フランでベルギーの一牧師に買ひ取られた程の實にあはれなものでありました。

晩鐘はそれから二三の人の手に渡り、一時アメリカ人の所有に歸してゐたこともありましたが、後には國家的名譽のために、巴里の一富豪が八萬フランといふ、殆んど信じられない程の高い値段で買ひ戻したものでした。今では幾百萬の複製品が作られ、どんな場末の額縁屋にでも、どんな田舍の繪葉書屋にでも、きつと飾られてある程の世界的名畫であります。その反動でもありませうか、次のやうな非難、即ち地平線があまり高すぎること、人物が堅苦しいこと、人物の前の空地を充すために、無理に籠と手押車とが描かれてあることなどを指摘する人が出來たくらゐでした。しかしこの作品がすぐれた傑作であることは云ふまでもありません。一日の仕事を終つた農夫の宗教的感情は、餘すところなく描かれてをります。ミレー自身もこれを描き上げた時に、次のやうなことを語つてをります。

『これは祈りの鐘だ。まさしくそれに違ひない。私はその鐘の音を聞くことが出來る。』

ミレーはこの『晩鐘』と一緒に『死と樵夫』といふ作品も出しましたが、これは陳列を拒絶されました。その報が巴里中に傳はつた時、人々は審査員に對して手酷い攻擊を加へました。小說家アレキサンダー・デューマの如きは、わざ〳〵ミレーの家まで出かけて行つて、この『哲學的な繪』に感嘆しました。さうして審査員達がこの作品を拒絶した理由は、多分『多くの青年畫家達が、これを模倣することを恐れたからであらう。その外には何等の理由を考へることは出來な

い。』といつたくらゐでした。ラ・フォンテーヌの童話から着想されたこの作品は、死を恐れて人生の重荷――薪――に取り縋つてゐる樵夫を主題とした彼の思想の深刻な表現でありました。

ミレーの繪が當時の人に理解されてゐなかつたことは、これ等の事實によつても想像されるでありませう。

近代繪畫史論に――

ミレーは一八四九年六月に、巴里を去つてバルビゾオンの村へ移住する。さうしてそれ以●來、一八七五年一月二十日に世を去るまで、一生を茲に住み、病氣とさうして深刻な、その爲に、自殺さへしようと思つたほどの貧しい生活に苦しみながら、全生涯の力を盡して、その寒村に働く農民の生活をかいた。

彼は農民の生活そのものをかいた。田園の生活として考へられる安逸、平和をかいたのではなく、農民の『農民たること』をかいた。都會の人間の憧憬に入り來る田舍の生活の光景は、現實の意味を失ひ、修飾された憧れの對象である。樂天的なる理想鄕である。謂はゞ一つの、抽象せられ假象化された現實である。ミレーはこの樣に遠く見渡され、夢想せられた田舍の農民をかいたのではなく、すぐ目の前に立ち、働いてゐる農民の、有るが儘なる生活其のものをかいたのである。彼れと雖も、農民生活に現れた平和なる光景を幾度もかいてゐることはゐる。雛鳥のやうに可愛い三人の小娘を、日當の好い戸口に懸けさせて、小さいロへ、食事の匙を分けて遣る若き母親を畫き、『小供に朝飯を喰べさす女』（一八六〇年）――そこには一羽の鷄が元氣好く驅けてゐる。壁のはづれから見える傍の畑には父の農夫が一心に土を堀つてゐる。平和がそこに湛へてゐる。――戸口の階段に立つて、前懸に入れて持つて出た餌を、頭を集めた六羽の鷄と、驅け寄つて來る二つの鷄に與へる。無邪氣なる『農夫の妻』を描き、窓際に坐つて小娘に『讀み方の課業』を授ける母親を描き、對岸の薄き林の梢の上に出た、丸い、大きい夕月の影を浴びて、暮れ行く川岸に、一人の女は膝を突いて水を汲み、一人は腰に手を當てゝ、水を汲む所作を眺めつゝ話す、『水を汲む女達』を描き、農夫の幼兒の『最初の歩み』も描いてゐる。父の農夫が擴げて差し出してゐる大きい手の方へ向つて、後から母親に扶けられつゝ、彼等の子供が、覺束無げに最初の歩みを運ぶのである。それは彼等の、枝を擴げた二本の樹木と、低い粗末な垣の後ろに、一つの窓と屋根を見る中庭の光景である。平和と愛がこの中庭に充ちてゐる。ミレーは實に、このやうな平和な理想

郷の如き田家の光景を、幾度となく種々なる場面を通して描いてゐる。唯、此の如き光景が、決してミレーの主題の凡てではなかつたやうに、此の如き意味が、これ等の樂し氣な田園生活の畫の意味の全部を盡すものでは無いことを注意しなければならぬ。

一八四八年のサロンに出した『穀物を篩る者』は、彼の農民の畫の最初とも言はれるものである。彼はこの繪を畫いて以來、今まで永く胸底に潛めた彼の原的なる理想に邁進することを、即ち農民生活の外何ものも描かないことを強く決心したのである。

この『穀物を篩る者』は、若い農夫が粗末な仕事着をきて、素足に、ひゞわれのした木沓（ゲタ）を履いて、穀物を一杯入れた箕を漸く抱へ、それを篩る光景を畫くのである。言ふまでもなく農民の苦しい力業を畫くのである。『休息』に於いては、葡萄の畠の世話をする農民が、畑地の上にはだしの足を投げ出して兩方の手を、力も失せ果てたらしく土に落して休んでゐる。帽子の廂が垂れ落ちて、その影に隱れる顏は、やつれて皺立つて強き勞苦を表はしてゐる。その口が開いてゐるのは、苦しさを喘ぐのである。

二人の女が、身體の何倍もある高い薪の束を負ふて、身體を出來るだけ前に屈めて、脊の重みと爭ひながら、夕暮の木の下闇を歸りつゝある『薪採り』や年老いた農夫が、痛はしく痩せた身體を押付ける薪の下に、それを荷つてゐる棒に、縋るが如く手を絡み、頸をすぐめ腰も膝も曲げ、今にも仆れ相にして動く『歸樵』も描かれてゐる。一八六二年の『鍬を持つ者』の勞苦は更に痛切である。頑强なる體格を持つ若き農夫が、兩足を踏み張つて、廣き野の眞中に、上體を前に屈めて、鍬の柄に兩手を支へて休んでゐる。その高い身體を、膝から少し上までの高さより無い鍬、支へとしては餘りに不便なる鍬の頭に、不自由らしく休める光景は如何に激しくその肉體が疲勞してゐるかを痛切に語つてゐる。顏も又痛ましくやつれてゐる。休息者らしく晴れ〳〵と見渡すやうな氣力も殘らない。彼は、殆んど目を閉ぢるやうに力なく落し、疲勞の中に沈み切つてゐる。口は喘ぐべく開かれてゐる。

彼は、幸福なる農民の家庭を幾度も畫いたが、それは彼の畫く田家の光景の凡てゞ無いのみならず、彼の畫いた家庭の意味の凡てゞも無かつたのである。一つの『病兒』では、父の農夫が窓の外から覗きつゝ家の内にゐる妻に抱かれた子供の病氣を氣遣つてゐる。丁度その窓の外側に据えた椽臺に、若い母親が病兒を搔き抱くのを、父の農夫が、藥餌を持つて戸口に現はれて、氣遣はし氣にいとはしき妻子を眺め、弱き心をもんでゐるのは、他の一點の『病兒』（一八七〇——三年）である。ミレーはさきの平和と共に、この心痛を描いたのであ

る。平和なる田園の樂しさと共に、茲に生息する人間に運命付けられた苦勞を描いたのである。彼はたゞ『農民の生活』を畫かうとしたのである。寧ろ農夫の生活に於ける人間性を畫かうとしたのである。言ふまでもなく、彼の願は、人間性を、眞なる意味の美を表はすに在つたのである。

『自分は、子供に朝飯をたべさす女に於いて、小鳥の一抔ゐる巣へ、親鳥が餌を持つて來るのを考へて貰ひたい。彼等に食物を作つて遣るために、父が働いてゐるのである。』とミレーは言ふが、夫れ故にこそ、彼は又『病兒』をいたはる若き兩親をかいたのである。又『水を汲む女』を描いたのは、『單なる水を汲む女、若くば下女などを畫かうとしたのではない。夫と子供等の爲に仕度をするスープに使用する水を汲んで來た主婦を畫かうと力めたのである。』といふ。彼は農民生活の形に現はれた人間性、若くば倫理性の核心を繪畫に於いて表はしたのである。これ等のものを藝術の立場に於いて見たのである。彼が樂しき田園の光景を描いたのも、單にその樂しさの故にでは無く、人間の生活といふ嚴肅なる意味の、夫れが一つの方式なるが故である。ミレーの――理想鄕主義の現れかとも見える――平和なる田園の畫には、悉くこの倫理性の大いなる背景がある。ミレーは實にこの意味に於いて現實なる人間を見た人である。云々

とありますが、參考すべきでありませう。

『稱讚』　ほめたゝふること、ほめそやすこと、『稱美』に同じ。
『眞價』　まことのねうち、眞の價値、
『讒謗』　惡しざまにそしりしふること、無いことをあるやうに惡しざまにそしること、『讒謗』に同じ。
『騰貴』　直段の高くなること、相場のあがること、下落の對、
『傑作』　勝ぐれてよき著作物、又は製作品、傑出せる作物、陸游の詩に『太古實傑作、筆落二九天上一、』とある。
『競賣』　一定の期日内に於ける多くの買手の中にて、最高價の申出人に賣ること、『せりうり』に同じ。
『巨額』　多くのたか、『多額』に同じ。
『回復』　とりもどすこと、もとのすがたにかへること、『恢復』に同じ。

補充文には拙著『畫聖ミレー』の中から、次の一文を學げておきませう。

晩年のミレー

アメリカの若い美術家、ワイヤット、イートンは休暇になつたので、バルビゾンにやつて來ました。そして美術家達の集る宿屋に泊りました。

『フランスで有名な大藝術家ミレー先生に是非逢ひ度いと思つて、こゝまでやつて來たのです。』

イートンはかう宿屋の亭主に話しました。さうしてイートンは食堂へ行つてみたのです。食堂は澤山の藝術家のお客で一杯で、如何にも愉快さうにビールをあふたり、或る者は踊つたり、又玉突きをやつたりしてをりました。

『ミレー先生も、きつと此の澤山の人の中にをられるに違ひない。是非お目にかゝらねばならぬのだ。』

彼は立つて客間に入つて、尋ねました。

『若しあなたはもしやミレー先生ではありませんか。』

客は怪訝な顏を向けて、相手の若い美術家を見ました。

『そら今度美術院の審査院長となられた、ミレー先生は貴方ではありませんか。何でも歳の頃からして、そつくりでいらつしやるから。』

『飛んでもない。お門違ひぢや。私はヴアヰオリンを彈くためにこゝに來てゐるのだ。』

イートンは頭を掻いて、四邊を見廻しました。

『あそこにいらつしやるのがさうらしい。如何にも審査員長らしく、素晴しい上等の上衣を召していられる。さうだあの方に違ひない。若し、失禮ですが、美術院審査員長ミレー先生ではございませんか。』

するに相手の客は、飲みかけのコップを卓の上に置くと、投げつけるやうに答へました。

『あの男がこゝに來るものか。玉突きや踊りは、あの男大嫌ひさ。俺はいつも此の宿屋に來て泊るが、木靴先生が、こゝに來てゐるのを、一度だつて見た事はないよ。逢ひたけりや、彼の家に出かけて行くが好いんだ。』

この宿屋に來れば、必ず逢へると思つて來たイートンは、がつかりしてしまひました。

『誰に尋ねたら、ミレー先生のお家を探し出せませうね。』

『誰だつて、百姓ならみんな知つてゐるよ。あの男は百姓と友達だからね。』

『何といふ先生を馬鹿にした言ひ草だ。』

イートンは、心の裡で奮慨しました。

日が西に入つたので、散歩に出かけようと、宿屋の門口を出た時であります。平原の彼方から夕べの鐘が鳴り出しました。

『此の鐘の音だ。ミレー先生があの立派な繪をかゝれたのも、此の鐘の響に依つて出來たのだ。』

彼は立ち停つて、兩手を胸に組み、お禱りをしました。

歩き出したが、そこら村中、粗末な家ばかりで、何處にもそれらしい家が見當りません。野良歸りの男女の農夫が、三々五々と歸つて行くのが見えます。木靴の音が懐しくイートンの胸に響くのでした。

『若し畫家のミレー先生のお家は、何處でせうか。』

農夫は立ち停つて、

『あゝミレー旦那のお家はな、こゝを眞直行かつしやれば、始めの四辻を、右に曲つて左側ぢや。窓にも入口にも、藤と葡萄の蔓が這つてゐますぢや。』

イートンは大喜びで、足を早めました。成る程教へられた通りに來て見ると、門口にその名札が掲げてあります。すぐには入り切れないで、門口を行き過ぎたり、戻つたり、或はそつと立ち停つて、中の樣子を伺つたりしました。窓から差した灯火が、敷石道の上に、先きひがりに、影をうつしてをりました。家の中からは、賑かな子供の笑ひ聲や、愉快さうな話聲が、洩れてくるのを、暫くはなつかしく耳を傾けるのでした。

『一體僕は何のためにバルビゾンに來たのだ。わざ〳〵ミレー先生に逢ひに來たのに、恥しがつて門を入り切れなくては、折角の繪の研究だつて、出來やしないのだ。さうだ、今日は日曜日だし、思ひ切つて、お訪ねしよう。』

お午過ぎ、イートンは出かけました。さうして藤の蔓の這つた門の戸を叩きました。

審査員長に逢へるのかと思ふと、胸の躍るのを覺へました。

門は開かれました。

出て來たのは五十の坂を越した、如何にもみすぼらしい百姓でした。

『ミレー先生にお取次を願ひます。先生にもお目にかゝり、その畫室も拜見したいため、わざ〳〵アメリカ人が巴里から、訪ねて來たと仰言つて下さい。』

『こちらへお通りなさい。そして畫室でお待ちなさい。直に先生が見えますから。』

みすぼらしい老いた農夫は、かう言つて、イートンを畫室へ通しました。

畫室には澤山の油繪や、パステル、その他鉛筆畫だの、ペン畫だの、澤山の作品が、積み重ねてありました。

彼は時の經つのを忘れて、繪に見惚れながら、部屋の眞中に、身動きもしないで、立つてをりました。

『お待たせしました。』

振り返つてみると、さつき門口で逢つた、みすぼらしい年老つた農夫でありました。折目もない、粗末なズボンに、赤い毛糸の上衣を着けて、ニコ〳〵してをりました。

『私がミレーです。』

といふ言葉は若いイートンに意外の感を與へました。

イートンは呆れて、みすぼらしい老人を見つめました。何と言つたものか、言葉も出ないで、見る〳〵顏が眞赤になりました。

『まあ掛け給へ。』

ミレーは友達に對するやうな調子で、かう言つて手をぐつと握りしめるのでありました。

第三十課　樂　地

教材の出所は讀本にも示されてをるやうに、幸田露伴氏の『洗心錄』です。洗心錄は露伴氏の隨筆雜著を蒐めたもので、大正三年の八月、氏が京都大學講師在任中に出版されたものです。原文はも少し長篇ですが、讀本にはその一部を摘出して、うまく教材化してあります。參考のため左にその原文を擧げておきませう。

樂　地

如何なるところにも樂しきところは有るべし、又如何なるところにも樂しからぬところ有るべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水ゆるやかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の臺には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆる事も有る例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色無く、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、あるは暮鴉の三四聲に寂びたる趣をおぼえ、木の根焚く山家の爐のほとりに罪無き話の興を湧かし、ぬく灰はたく煨芋のあたたかきに笑むをかしさも有るべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折は有るべく、茅店草屋にも樂しき處は有るべし。

弓弦は直く弓は曲れり、此の言葉、まことに戻く可きにはあらず。されど曲れる弓も直なるところあればこそ箭を放つて中るなれ。むら有りては弓の用替る。これ曲れる弓に直なるところあるなり。直なる弦にも曲れるところ無きにはあらず。麻の纖維を詳しく視れば必らずや捩り絢られて、さて其强さを保ち居るにあらずや。これ直なる弦にも曲れるところは有るなり。樂しきころにも樂しからぬところの有り、樂しからぬところにも樂しきところの有りといふも、おほよそ此の如し。諦觀の工夫足らざる時は、事物をたゞ一ト向にのみ思ひ做すものなれども事物にただ一ト向なるは少し。好きが中にも惡しきが錯り、苦しきが底にも樂しきが潛めるものなり。

此世は我一人のために設けとゝのへられたるものにあらず、されば親としては吾が子をも飽かず思ふことあり、子としては吾が親をも物足らず思ふことあり、人を使ひて齒痒くもどかしくおもひ、人に使はれては腹だゝしく不滿不快におもふことあるも、免れ難き世の習な

り。まして身貧しく、學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜く、あぢき無く、樂しからず思ひて、我が苦しき目をのみ見て、生命ながらふ者も有らじなどと、身をも棄て果てむほどにまで、或は恨み、或は瞋り、或は憂ひ悲むことも、おのづから有る可し。されど其の人より言へば、窮苦の底に沈みて、右へも左へも行くべき道だに無きやうなるも、他の人より言へば、如斯如此したらんには宜かるべきものをとおもひ、或はまた少しは樂しきかたも無きには有らざるやう思ひ做さるゝも有るべし。事物はおほよそたゞ一ト向ならぬものなれば、いといと樂しからぬが中にも、樂しきところ、樂しむべきところも有るべければなり。

樂しきところ、樂しむ可きところを見出し得れば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることも有るべし。さ無きまでも人若し常に樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜くなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過ごすやうになるべし。樂地を見出すべし、努めて樂地を見出すべし、努めて樂地を見出すの習慣を身に賦せんと心がくべし。

むかし或江州の行商人と他の國の行商人と共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩實に重ければ、二人とも憊れ苦みて憩ひけるが、苦しさの餘りに江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし、身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり、と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、卿の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ汗も流るゝなり。されども我は然おもはず、此の碓氷の山を十ほども重ねたる高き山もあれかし、さらば數多き行商人は皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其の時我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり、碓氷の山の高からぬこそ口惜けれと云ひしとなり。同じ苦艱の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず。力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく〳〵思ひ味ふべきなり。

露伴は東京の人、名は成行、慶應三年の生れです。夙に西鶴を讀んでその影響を受け、その處女作は京傳張りの洒落本『風流禪天魔』といふのであつて、尾崎紅葉はこの一書を讀んで大いに

感じ、某を介して始めて交を結びました。文名の定まつたのは。明治二十三年に出した『露團々』の一作からです。『風流佛』『一口劍』『二日物語』『きくの濱松』『ひげ男』『椀久物語』の諸作の外、後年に至つて『天打つ波』の大作があります。獨學力行、學古今に通じ、聊かの學歴もなくして文學博士の學位を贏ち得たのは人の知るところです。曾て京都大學の講師となりましが、辭して後閑雲野鶴を友としてをります。彼が後年哲理の中に立籠り、全然筆を小說から斷つてしまつたのは惜しいことです。『欄言』『長語』『頼朝』『潮待ち草』などの外、時々公にされる隨筆の中には、その博識と卓見と素朴雄渾の文とを見ることが出來ませう。

露伴は紅葉と並び稱せられ、文壇一方の雄として重きをなしてゐたのでありますが、紅葉は兎角在るが儘の實際を客觀的に寫すといふ行き方、これに對して露伴は自己の理想を描くを旨としました。即ち彼は寫實派客觀派であり、これは理想派主觀派なのであります。紅葉の寫實主義がその實一種の趣味に囚はれた淺薄なものであつたと同樣に、露伴の理想主義も亦幼稚なものであつたことは、時代の然らしめるところとは云へ、爭へない事實であります。

露伴の思想の一面は、佛敎などから來た悟道といふこと、即ち世の中を悟つてしまふといふことで、一面は意力に對する憧憬、即ち何處までも意地を張り通すといふことです。一旦意地を張り出せば、それを貫かねば止まない。悟つてしまへば思ひ切りよく拋つて超然とするといふのが彼の理想で、彼の作中には常に斯うした性格の人物が出て來ます。つまり斯うした理想を寓するために彼は小說を書いたので、實際の人生を觀察して描いたものではありませんでした。だから彼の作には寫實の要素が至つて乏しいのです。しかしその文章は紅葉と相並んで甲乙し難く、二人共西鶴の影響から生れた文ではありますが、紅葉はより艶麗なるに比し、露伴はより雄健です。紅葉の文は細工に過ぎて生氣を失くしたところがありますが、露伴の文は飽くまでも力が充ち滿ちてをります。紅葉の文は才の文、露伴の文は氣の文です。で、同樣に紅葉は才の人でしたが、露伴は氣の人とも云へませう。また紅葉は趣味の人でしたが、露伴は思想の人だとも云へませう。露伴は紅葉の『金色夜叉』と相並ぶべき大作『天打つ波』を出しましたが、思想の人なる彼、さうして悟道に憧憬を持つた彼は、今や全く悟りすまして文壇の人ではなくなつてしまひました。しかし最近折に觸れて發表する隨筆雜著などは、なほ當代の人の及びもつかない含蓄と暗示に滿ち、讀書子の推頌讃嘆する所となつてをります。この敎材の如きもたしかに悟道的で、悟りすました露伴のおもかげを想像するにふさはしいものだと思ひます。

文は三段に分れ、第一段では春と冬とを對照して苦樂の境地を說き、第二段では苦中に樂地を

見出すことの必要な所以を說き、第三段では以上の所說を歸納して樂地を見出す習慣の大切なことを敎へてをります。

『いかなる處にも樂しき地あるべし、又いかなる處にも樂しからぬ地あるべし。云々』

この段は春の日と冬の日とを對照して、春の日の樂しきが中にも悲哀があり、冬の日のうら悲しきが中にもおのづから捨てがたき樂地の存することを說いて、後說に入る枕としてをります。

原文ではこの次に、

『弓弦は直く弓は曲れり。此の言葉、まことに戻く可きにはあらず。されど曲れる弓も直なるところあればこそ箭を放つて中るなれ。むらありては弓の用替る。これ曲れる弓に直なるところあるなり。直なる弦にも曲れるところ無きにはあらず。麻の纖維を詳しく視れば必らずや捩り絢られて、さて其强さを保ち居るにあらずや。これ直なる弦にも曲れるところはあるなり樂しきところにも樂しからぬところあり、樂しからぬところにも樂しきところありといふも、おほよそ此の如し。諦觀の工夫足らざる時は、事物をたゞ一向にのみ思ひ做すものなれども事物にたゞ一ト向なるは少し。好きが中にも惡しきが錯り、苦しきが底にも樂しきが潛めるものなり。』

といふ一節があり、なほ

『此世は我一人のために設けとゝのへられたるものにあらず、されば親としては吾が子をも飽かず思ふことあり。子として吾が親をも物足らず思ふことあり。人を使ひて齒痒くもどかしくおもひ、人に使はれて腹だゝしく不滿不快におもふことあるも、免れ難き世の習なり。まして身貧しく、學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜く、あぢき無く、樂しからずおもひて、我が如き苦しき目をのみ見て、生命ながらふ者も有らじなどと、身をも棄て果てむほどまで、或は恨み、或は瞋り、或は憂ひ悲むことも、おのづからあるべし。されど其の人より言へば、窮苦の底の底に沈みて、右へも左へも行くべき道だに無きやうなるも、他の人より言へば、如斯如此したらんには宜かるべきものをとおもひ、或はまた少しは樂しきかたも無きには有らざるやう思ひ做さるゝもあるべし。事物はおほよそたゞ一ト向ならぬものなれば、いといと樂しからぬが中にも、樂しむべきところもあるべければなり。』

の一節があつて、露伴その人の思想がふつくらと盛り上つてをりますが、教材では全然その部分が削除されてをります。

『生色』　いき〳〵したる顏色、いき〳〵したるやうす。孟子に『其生色也、睟然見ニ於面一』とある。

『うら悲し』　心中に悲しと思ふこと、萬葉集に『春の日のうらがなしきにおくれゐて、君に戀ひつゝうつしけめやも』とある。

『胸をふさぐ』　胸が詰つて通らぬこと、胸が一ぱいになること、戀八卦柱曆に『思ひ返せば胸ふさがり目ふさがりの駒の足』とある。

『をかしさ』　おもしろし又はよろこばしの意で、趣味あり興味あるありさま、

『金殿玉樓』　極めて美麗なる殿舍高どのの意、金殿はこがねにて飾り造りたるとの、玉樓は珠玉にてちりばめたる高どの、太平記に『昔の玉樓金殿に引きかへて、憂き節茂き竹椽』とあり、又王涯の詩に『玉樓金殿曉光中』とある。

『樂しき所、樂しむべき所を見出し得れば、いかほど窮苦不快の中にありても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に耐へしのび、やがて人上の人となり得ることもあらん。云々』

この段は教材の山で、前段を受けて苦中に樂地を見出すことの必要な所以を、露伴一流の雄渾な筆致で力强く說き示してをります。

『樂しき所、樂しむべき所を見出し得れば、云々』は冒頭の『いかなる處にも樂しき地あるべし。又いかなる處にも樂しからぬ地あるべし。』と相呼應して、一篇の趣旨をしつくりと引きしめてをります。

『習はし』は習慣、『人上の人』は人間以上の人、卽ち神佛の意です。

『人上の人』　人間以上の人の意、神佛を指す。

『習はし』　ならはすこと、馴れしむること、『習慣』又は『習俗』に同じ。

『人品』　ひとがら、なりふり、『人格』又は『品性』に同じ。沈約の文に『雖ニ人品庸陋一、冑レ實參レ華』とある。

『分別』　わきまふること、かんがへ、『思慮』に同じ。

『樂地を見出すべし。力めて樂地を見出す習はしを身に附けんと心掛くべし。』

最後の一段は結尾で、全篇に對して結論の形をなしてをります。

先づ第一段第二段の趣旨を要約して、『樂地を見出すべし。』と簡潔に結論を與へ、次いで『力めて樂地を見出す習はしを身に附けんと心掛くべし。』と全篇の趣旨の存するところを明示してをります。原文では『樂地を見出すべし。努めて樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。』と疊みかけて、更に一段の緊張味を添へてをります。

なほ原文には最後に近江商人の談を引用して、一路兩人、一境兩狀の味ふべきことを附說してあります。

補充文にはこの『樂地』の次に出てをる『苦境』の一篇を摘出しておきませう。『苦境』は『樂地』の姉妹篇とも云ふべきもので、この教材の取扱者としても、是非一讀を要すべき好資料なのであります。

苦　境

雲を瞻れば雲は悠々として行き、水を觀れば水は洋々として流る。草は茸々として生ひ、樹は蓊々として立つ。天地の間の物、皆やすらかに其の性を遂ぐるに似て、ひとり此の世の中のみは、不如意の事の常に七八、與に語る可き人三四無きに似たり。されど雲の象を視るに、綿の如くに屯し、帶の如くにたなびけるのみにはあらで、或は下豐にして上殺げ、或は上整ひて下亂れ、或は斧劈を被れるが如く、或は刀截に遭へるが如くなるも少からず。これ皆風に揉まれて是の如くなるを致せるなるべし。水の相を考ふるに、練絹を曳けるが如くに易く注ぎ、簾を置けるが如くに直に走るは稀にして、或は巖に塞かれて屈まり、或は山に會ひて縈り、或は遏められて瀦り、或は扼せられて激し、東に曲り西に折れて、漸くにして海に至る。これ皆地に制せられて然らざるを得ずして而して然るなるべし。草の萠ゆる、樹の育つ。其の初は必らず勾曲して土を抽く、屈せずして出づるは殆ど無し。これ亦容易平安には日の惠にあひ、露の恩に霑はざるなり。雲水草樹、猶是の如し、よろづの物、苦境を經ざるは絕えて無しといふ可し。

智慧拔群ならば苦を排し樂を得べしと思ふは、思ふこと淺きなり。智ある人には智ある人の苦あること、たとへば碁の道に深く造れる人も、又一勝一敗す、其の敗るゝの時は苦慮を免れざるが如し。勇力絕倫ならば、苦を拔き樂を致すべしとおもふも、思ふこと至らざるな

り。力ある人も心に任するのみにはあらぬこと、たとへば力士の優れたるものも、また一生勝ち遂ぐべくはあらず、其の負くるの日は苦戰を免れざるが如し。富みて且つ貴く、威ありて權ありとも、其の人常に樂地に在りて苦境に居ること無かるべしと思ふは、甚しくあやまれり。富者には富者の苦境あり、貴者には貴者の苦境あり、威權あるものには威權あるものの苦境あり。柱大なれば梁もまた大にして、受くる力の少からざるが如し。南面の樂といふ語はあれど、帝王と雖も苦境無き能はず。明君英主は夜深うして寢ね、曉夙く起き、禮に徇ひて身を克し、義を取り欲を舍て、夢にも國の民のためと祈り求むるの意を遺れぬやうにし玉ふものなり。天を樂むといふこともあれど、聖賢と雖も苦境無き能はず。古よりの聖賢の、歎息悱惻の言多きをもて知る可し。まして豪傑俊偉の士の如きは、魚の味の美なるものの釣られ、禽の肉の旨きものの羅さるゝが如く、世の大任を負ひ、邦の公益を圖らざるを得ざるより、樂地に居る事は少く、苦境に立つことは多く、艱難困厄の間に一生を終るは、いつの代、いづれの國に於ても然り。凡常の人は、實に苦境といふべきほどの苦境に立つことも無くて終るものなれども、材小なれば堪ふる力も乏しきまゝ、苦境に沈めりと思ひ惱むこと多し。とてもかくても苦境の存することを免れぬは人の世なり。

苦境は種々なり、されと其の最も身に近きにより之を言へば、食の吾が意に任せぬこと、これ第一なり。衣服往居の吾が意に任せぬは、此に比ぶれば猶忍ぶべし。身の暇の吾が意に任せぬことこれ第二なり。吾が身に暇無くて我が爲さんとすることを爲す能はざるは、食事の吾が意に任せぬ苦にも劣る可からず。身の力の吾が意に任せぬこと、これ第三なり。或は病み或は弱くて我が心は有りながら、吾が身の堪へざる、これも身の暇無き苦にも劣る可からず。寒くして衣服の心に任せぬ、風雨冷熱に住居の心に任せぬ、これも苦しといふべし。其の最も心に切なるより之を言へば、自から信ずるところ無き、これ第一なるべし。吾が思ふことの意に任せぬこと、これ第二なるべし。吾が才德力量學術の足らざること、これ第三なるべし。人に誤り解せられて、無實の責を負ひ、咎を被りたる、これも苦しといふべし。さりながら、人の世に在るや、肩あれば衣ざること無く、口あれば食はざること無しと云へり、粗糲といへども一鉢の飯あり、寒冷といへども一盃の水あらば、則ち活くに堪ふ。最も身に近きの苦も、さばかりは人を苦めぬものなり。男兒の身に肉を包み、肉に骨を有する、自ら信ずる處無くてはあるべからず。苟も自から信ずる處あるや、最も心に近きの苦は無きなり。身心に緊切親近するの苦にして此無きや、何の眉を蹙め神を傷ましむることかこれ有

らんや。

語に曰く苦中の苦を喫せずは、人上の人と爲り難しと。苦境に立つをば甘なふべきなり。苦境を避けて走らんとはなすべからざるなり。

古の人を學ぶに、古の人の功を成し意を遂げたるの形跡を見て之を學ばんとする勿れ。汲むことを善くするとも、古き河にも古き水は流れぬなり。古の人を學ぶに古の人の苦に堪へ心を鍊りたるの眞處を看て之を學ぶべし。磨ぐ術を悟りぬれば、刀の刃は刀の利味を出すものなり。刀の硎にあふは、刀に取りては吾が身の瘦するほどの苦境なり。干將莫邪も硎に遇はずんば吹毛を斷ずるに至らず、英才大器も苦境に立たずんば有用の人たる能はず。歡んで苦境を迎ふべきかな。

農村用 **高等小學讀本の眞使命** 卷三終

昭和四年三月二十五日　初版印刷
昭和四年四月五日　初版發行

農村用高等小學讀本眞使命（奥附）

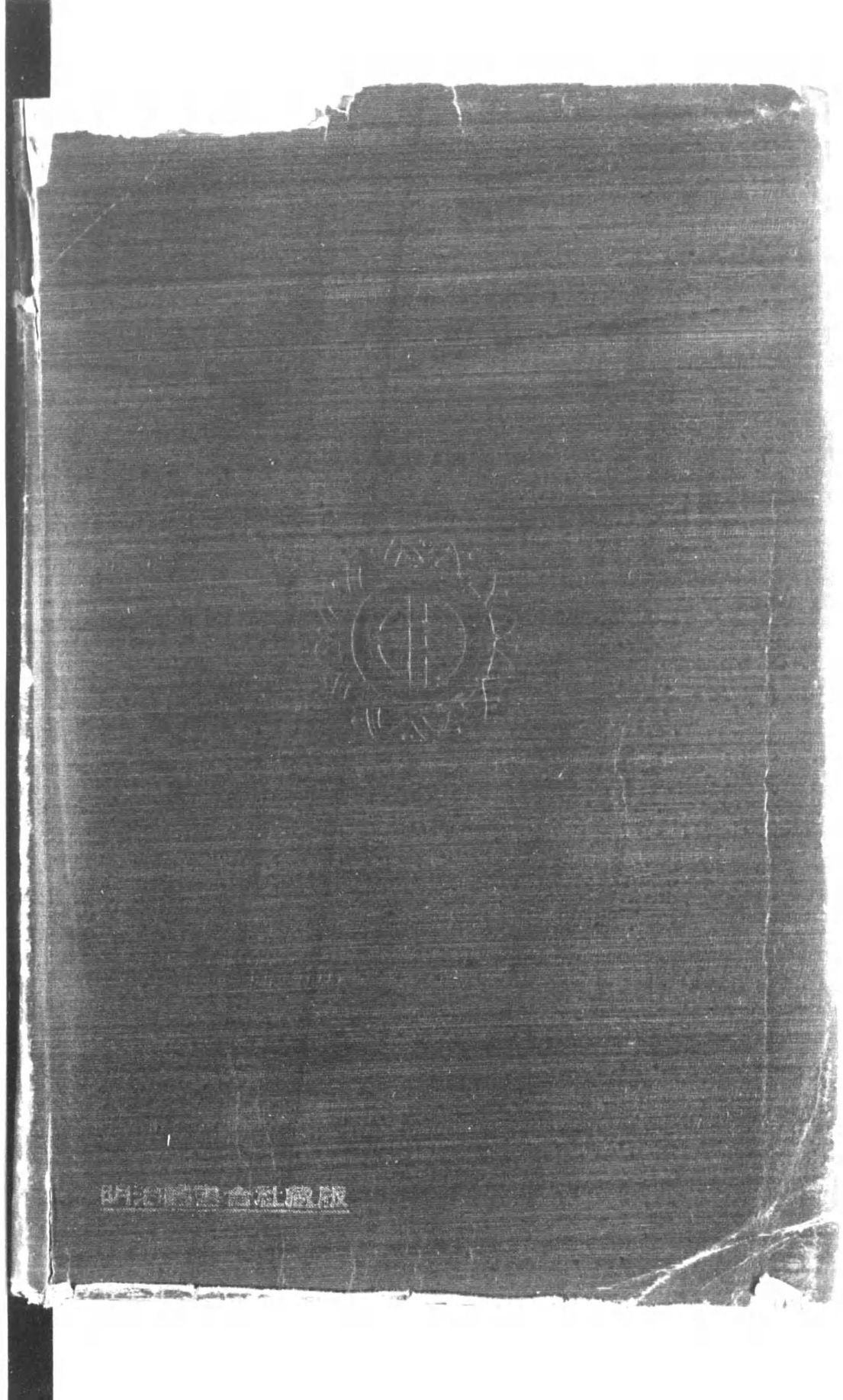
定價金參圓五拾錢

著作者　東京市京橋區入舟町五丁目一番地　友納友次郎
發行者　東京市京橋區本湊町七番地　藤原惣太郎
印刷者　山崎治兵衛

檢印　不午

發行所　東京市京橋區入舟町五　振替東京一八五一三番　明治圖書株式會社
賣捌所　東京　林六合館　大阪　合資會社　柳原書店
名古屋市　川瀨書店　久留米市　菊竹金文堂　佐賀市　大坪惇信堂

（明治圖書株式會社印刷部　七星社印刷所）

263.2
243

終